

### 第3章 ルネサンスと宗教改革期の旅

前章まで、近代へ向って先行した「東方」への地平拡大と、大航海時代の地理的発見の旅を追ってきた。本章では、ヨーロッパ人の精神面の変化が、宗教と科学の相克を経て近代へと向う経緯を、旅との関わりを軸に追ってみよう。観光現象の本質は、知的好奇心の発露にこそ求められるからである。キリスト教の世界観が支配的であった中世では、宗教が人々の自由な想像力の羽ばたき妨げ、好奇心を自由に追求することを許さなかった。しかし、ある意味では、世界観の強制が強力であったからこそ、それと調和させるため、あるいはそれと戦うための努力において、人々の疑問と探究心、論理的思考力が鍛えられていったのだとも考えられる。13世紀以降、試練の中で激しくきしみながら、ヨーロッパ人はキリスト教以前の古代ギリシャ・ローマ文化を範とすることによって、ヒューマニズム（人間主義）に向かって足早に歩き始めるのである。

中世末期、巡礼の旅も観光的要素を色濃く持つようになってきたことは既に述べた。その背景には、ヨーロッパの人々の精神的な成長と自由な思考への渴望、そして十字軍を契機とする外界との接触の影響があった。「愛と歌の中世：トゥルバドゥールの世界」の中で、ジャンヌ・ブーランは「…ビザンチンとエルサレムに幻惑されてもどってきた12世紀はじめのわれわれの祖先たちは、それまで送っていた生活とは異なる生活が可能なのだという確信を持ち帰った。自分たちのそれに比べてはるかに進んだ華麗なビザンチンとアラブの文明に接したエリートたちは、心情や作法や文化の洗練とは何かを理解した」と述べている。

最初に目覚めたのは東方貿易で富を築いた北イタリアの諸都市であり、それらの都市での活動がのちにルネサンスと呼ばれることになる文芸復興運動の震源地となった。教皇の所在するローマにも変化は起こった。たとえば、中世にあつて、ローマ市は何よりも巡礼の目的地であり、巡礼者は聖地ローマを訪問することで、何がしかの現世的利益を得たいと期待して訪れていたが、ルネサンス以降は、古代文化そのものへの関心によるローマ訪問が加わった。古代ローマの歴史文献と遺跡の発掘などを通じて、その傾向は加速度的に拡大していく。言い換えれば、中世では無視されてきた異教時代の古代ローマの遺跡が、ルネサンス期には魅力ある観光資源に生まれ変わっていくのである。15～16世紀のイタリア・ルネサンスは、観光の夜明けを待つ時代であった。

そこで今回も、ルネサンス期の旅に入る前に、時代背景としてのルネサンスと宗教改革の展開を史書の記述によって概観しておこう。

#### 1. 古代の復活（ルネサンス）

フランス語の「再生」を意味する普通名詞であった《ルネサンス》が歴史の学術語に転じるには次のような過程があった。まず、自ら建築家であり画家であったジョジョルジオ・ヴァザーリ（1511～74）が、ルネサンス期の建築家・彫刻家・画家たちの作品と生涯を描いた「芸術家列伝」を1550年に出版し、その冒頭に次のように書いた。ただし、参照した

平川祐弘他訳にはこの部分が訳されていないので、中央公論新社「ルネサンスと地中海」からの引用である。

蛮族が各地に興って、ローマ人に背いた。大帝国の崩壊がおこり、あわせて全世界とローマ市が廃墟となった。最良の芸術家たち、彫刻家・画家・建築家すべてが、おなじように姿を消し、失われた。……あらゆる敵のうちもっとも凶暴なのは新しいキリスト教の熱狂的な信仰であった。この信仰は長く血みどろの闘いのあげく、異教徒世界の古来の教条を押しおして、抹殺した。精一杯、彼らは異教の誤りをただし、異端の疑いの残るものであれば、いずれも除去した。素晴らしい立像も彫刻もモザイクも、そして異教神の装飾をも破壊してしまった。

ヴァザーリによれば、中世人は古代芸術を破壊した後、ゴシック（ゴート族のという意味）という野蛮でグロテスクな教会を建てたが、1250年頃、トスカナの土地がはぐくむ高貴な精神に対して神が憐れみを与えられ、初源に回帰することをうながされたのだという。ローマの廃墟に住む人びとは、アーチや列柱・立像・階段などの残滓を目撃してきたのであり、かれらは魂に力が戻ると、良否を見分け、悪しきゴシックの古習を捨てて、古代ローマを模倣することに復帰するすべを学んだ、と書く。そこから話をチマブエ、ジョットへと進め、次々に新時代の芸術家を取り上げていく。後代の人々がイタリア・ルネサンスの群像の詳細を知り得るのは、ヴァザーリのこの「列伝」に負うところが大きい。ヴァザーリ自身がルネサンス後期の人であり、同時代人として古代の復活（リナシタ）を宣言し、リナシタ（ルネサンス）が何であるかを述べ、かつ礼賛したのであった。

イタリア語の「リナシタ」が、同意のフランス語「ルネッサンス」という学術用語として使われる契機となったのは、1855年にフランスの歴史家ミシュレ（1798～1874）が「フランス史」第7巻にこの名を当てたことによる。5年後の1860年、スイスの歴史家ヤーコブ・ブルクハルト（1818～97）がミシュレの用語を受け継いで「イタリア・ルネサンスの文化」を著す。渦中にあったヴァザーリと違って、ブルクハルトは近代人として《ルネサンス》を文化や社会の歴史全体の中に位置づけて解説した。近代精神とは、キリスト教信仰という価値ではなく、《現世での経験と自由》に最大の価値を置く精神であって、ルネサンスがその近代精神の出発点であること、自然科学も技術文明も、啓蒙理性も合理思想も、みなルネサンスに故郷を共有していると説いた。中世という長い期間、この精神は痛ましくも抑圧されてきたのであり、イタリア人が最初に中世を乗り越え、古代を復活させることによって芸術と科学の発展をもたらした…。

ブルクハルトは背景となる12、3世紀のイタリアの政治・経済状況を踏まえて人間革命が進行していく様子を描写し、イタリアでは北方の諸国とは異なる目覚め方をしたことを明確にした。イタリア諸都市は、中世において早いうちからビザンチンや東方との貿易に従事し、異郷に接触し、文化を吸収してきた。また、廃墟になってはいても、古代帝国の遺産が身の回りに溢れていたから、「古代ローマ」は北の人々にとってのように観念の世界で

はなく、手に触れ得る姿形を持ったものなのであった。ルネサンスの先鞭をつけたイタリアについて、塩野七生は「ルネサンスとは何であったのか」の冒頭で、ひと言でいえば「見たい、知りたい、わかりたいという欲望の爆発が、後世の人々によってルネサンスと名づけられることになる、精神運動の本質でした」といい、続けて「その欲望は爆発しただけでなく、造形美術を中心にした各分野における《作品》に結晶しています」と説明する。爆発といわれるほどにまで「知りたい、分きたい」という欲望を抑制し鬱積させてきたのは、カトリック教会による思想信条の統制であった。それゆえ、ルネサンスが教会改革ないし宗教改革と一体となって進行したのは当然であった。イタリアで始まったルネサンスの運動は、北方および全ヨーロッパに次第に浸透してゆき、L.ルフェーブルの言葉を借りれば、「知の追究、美の追究、聖なるものの追究。要するにこの三つこそ《ルネサンス》と《ユマニスム》と《宗教改革》とを生きかつ築いた当時の人間の、情熱的営為の精髓を最もよく特徴づけ、要約するもの」であった。（「フランス・ルネサンスの文明」P4）

### 抑圧された精神の自由

そこで、まず中世キリスト教のヨーロッパ全土への普及と、これによる価値観の固定化・一本化の状況について見てみよう。J.B.ビューアリは「思想の自由の歴史」の第I章（序論）において、次のような例を用いて、排他的宗教の思想抑圧の構造を説明している。

…ある民族が日蝕という現象は有益な情報を伝えるために神が用いる信号であると信じていたとする。そこに頭のいい人間が日蝕の正しい科学的原因を発見したとしよう。すると同胞たちは、第一に、彼の発見が自分たちの観念と調和させることが困難であるためにこの発見を嫌う。第二に、自分たちの共同社会に非常に有利だと思っている約束ごとを覆すからこの発見を嫌う。第三に、この発見は神に対する冒瀆として恐れられ、神聖な信号を解読することを職分とする祭司たちは狼狽し、憤激する。その結果、発見者は異端者として葬られなければならない。

序論に続く第II章を「自由な理性：ギリシャとローマ」、第III章を「幽閉の理性：中世時代」、第IV章を「開放の燭光：ルネサンスと宗教改革」としていることから明らかなように、ビューアリは、古代には認められていた思想信条の自由がキリスト教の価値観の強制によって閉ざされ、このことによって中世は暗黒時代になったと談じる。中世が《理性が幽閉された時代》となったのは、第一に、その教理のゆえであるとする。キリスト教が禁制宗教であった時代には信仰の自由を訴え、権力に対して信教の寛容を要求していたにもかかわらず、国家宗教として権力を獲得するや、それまでの見解を放棄して思想統制を始める。人間救済はもっぱらキリスト教会の中にのみ見出されるというのが基本的な教理であり、この教理を信じないものは永久に地獄に墮ち、神は神学的な過ちを極悪の罪として罰し給うと確信する。その確信ゆえに《唯一の正しい教理》を人々に押し付け、従わない者を迫害した。異端者は普通の罪人以上の罪人であったから、いかに有徳の士であろうと、宗教

的過失から神の敵になるような人間は地上から抹殺してしかるべき、となったのであった。

第二は、聖書そのものにあるとする。初期のキリスト教徒が聖書の中に、文化程度の低い観念と野蛮性が充満しているユダヤ人の文書（旧約聖書）を加えてしまったことが不幸の元であるという。聖書は、歴史のある一時代の観念と習慣とを神が定めたものに祭り上げることによって人間の知性の進歩への障害となり、遠い昔の書物の内容を永遠の真実とすることによって、人間の発展の進路に特別厄介な邪魔者を横たえたと主張する。もし、キリスト教徒が新約聖書だけで満足し、エホバを切り捨て、旧約聖書の天啓を放棄したならば、歴史は変わっていたであろうとまでいう。そして、キリスト教が科学研究の重要な分野において妨げになってきた過程を次のように説明する。少し長いが引用してみよう。

…聖書の無謬的権威にもとづいて教会が真理だと言明している謬見が支配権を握っていた。ユダヤ教の創世記と人間墮落説は、キリスト教の贖罪説と固く絡みあって地質学と動物学と人類学を自由な研究から締め出した。太陽は地球の周囲を回転するというのが聖書の字義どおりの解釈によって真理とされた。教会は地球の対蹠面存在説（地球が球体で裏側に人間が存在しうるとする説）を排斥した。セルヴェツス（16世紀に焚殺された）の告発理由の一つは、ユダヤは牛乳と蜂蜜の溢れる国であると聖書に記されているのに、ユダヤを憐れむべき不毛の地とするギリシャの地理学者の説を彼が信じたという点であった。ギリシャのヒポクラテスは、医学と疾病を経験と方法論的探求を基礎に研究したのだが、中世期になると人々は野蛮な原始的観念に逆戻りした。肉体の悩みは神秘的な原因—悪魔の邪心とか神の怒り—などのせいとされた。…中略…化学（錬金術）は悪魔の技術と考えられ、1317年に法王によって罪とされた。正統主義を熱心に信奉しながらも厄介な科学研究の本質をもっていたロジャー・ベーコンの長期の禁獄は、科学に対する中世的不信の例証である。p 50

永田諒一「宗教改革の真実」は、中世では一般人が知識を吸収することを教会が意図的に妨げてきたという。端的にいえば、文字を読むのは知識人階級だけに限定し、民衆は知識と権威を有する人から口述で知識を得ればよいのであって、民衆自身が文字を読むべきではないとされた。それに、中世を通じて学問のための言語は古代ローマ帝国の言語であったラテン語であり、ラテン語が読めなければ学問への道は閉ざされていた。一般人がラテン語を学ぶ機会ほとんどなく、学問は聖職者や修道院を中心に行なわれ、それ以外では貴族階級のごく一部に限定されていた。聖書をラテン語がわかる聖職者だけのものにして俗語への翻訳を禁止し（翻訳を試みた者は厳しく罰せられた）、民衆は教会を飾る彫刻・絵画や聖職者の話などによってキリスト教の教えを受け入れてきたのであった。

このような精神的不自由さからの解放の動きは、一方において、知識階級であった修道院や教会組織の中から、他方において、俗人知識人の両方から現れてくる。前者がいわゆる宗教改革運動へと展開し、後者が後世ルネサンス運動と呼ばれるに至る古代ギリシャ・ローマへの文芸復興運動となった。そこで迂遠ではあるが、中世末期の学問の状況を概観

しておこう。

## 革新の 12 世紀

史書は一樣にヨーロッパ中世後期の 12 世紀は、革新の世紀であったとする。12 世紀から 13 世紀にかけての時代は十字軍の時代であるとともに、キリスト教会の革新の動きが活発化した時代でもあった。堀米庸三・木村尚三郎編「西欧精神の探求：革新の十二世紀」は、12 世紀がなぜ革新の世紀かとの問いに答えて、ヨハン・ホイジンガの言葉「西洋キリスト教文化がその決定的な姿と形を得たのはいったいどの時代なのか。その時代を特定しようとするならば、12 世紀とせねばならないだろう。十二世紀は比類なく創造的で造形的な時代であった。普通、ルネサンスと呼ぶ時代よりも、1100 年代の一世紀のほうがはるかに多くの覚醒と発展に満ちている」を引用したうえで、「…元来、中世という時代は野蛮な迷妄の時代であったと久しく考えられてまいりました。それが実はそうではない、ヨーロッパ精神の故郷<sup>ふるさと</sup>なのだ、というように考え直されるようになりましたのは、だいたい二つの世界大戦の間の時期でよろしいのであります」と紹介し、十二世紀が内的にも外的にも、激動に満ちた時代であったことを様々な事例や考証をもとに強調している。そして、十二世紀に生じた新しい現象のひとつが、学問の重視と大学の誕生であった。

## 知性の解放と大学の誕生

ギリシャ、ローマには偉大な学問の伝統はあったが、専門的な学問を教授し研究するための組織としての大学はなかったから、今日のような総合高等教育を目的とする大学は、ロマネスクやゴシックの大伽藍、および議会などとともに中世ヨーロッパの産物であるという（堀米）。では、大学はいつどのようにして生まれたのか。ジャック・ヴェルジェ（大高順雄訳）「中世の大学」によると、最初期の大学は既存の学校から自然発生的に誕生したもので、その時期は 12 世紀の中頃のいつかとしかいいえないという。最初期の大学には設立の宣言も趣意書もなく、それなりの実態ができた後で公的な追認が行われるという経過をたどっていて、実態と形式的な成立時期がずれているからである。自然発生的に誕生したとされる主な大学はボローニャ大学、パリ大学とオクスフォード大学である。この三大学から中世末期までに数多くの大学が派生し、あるいは新たに設立されていく。学びたい人たちにとって幸いなことに、ヨーロッパはキリスト教文化圏として国境を超えて一つであったし、学問のためにはラテン語が共通語として存在したから、学生たちはどこへでも行って学ぶことができた。教授資格も万国共通で教授たちも移動したから、最初から大学は国際的であった。制度が誕生すると大量の学生がヨーロッパ中を移動しつつ学ぶようになり、教授もそれにつれて多数誕生してヨーロッパ各地を移動した。

中世の大学の誕生とその後のありようは、キリスト教の影響を早くに脱していたイタリアすなわちアルプス以南と、アルプス以北とは大きく事情が異なっている。端的に言えば、ビザンチンやアラブ世界と商業を通じて接触のあったイタリアでは、在俗の学校が 12 世紀以前に多数存在していたのに対し、イタリア以外では教会や修道院などに付属する学

校しかなかったから、大学誕生も世俗的だったイタリアと、パリ大学を中心に学問がキリスト教会に付属していた北方とは異なる展開を見せたのである。

**イタリア最古のボローニャ大学** 中世で専門知識を授けた最古の学校は南イタリアのサレルノにあった医学校であるといわれ、11世紀の半ばにギリシャの医学者ヒポクラテスの研究にもとづく講義が行なわれていたことが知られている。しかし、サレルノは13世紀半ばまでは大学としての制度をもたず、中世の大学の特徴である総合的な学問の性格を欠いていたため、ボローニャが最古の大学とされる。なぜボローニャだったのか。発端は11世紀以来北イタリアに栄えていた数校の在俗の学校であり、ボローニャ大学の母体になったのはいくつかの公証人養成学校であった。これらの学校での教育は自由学科を基礎とし、それを蛮族法とテオドシウス法典から借用した法律の実務的知識によって補っていた。11世紀の後半、カノッサの屈辱（1077年）などで知られる神聖ローマ皇帝と教皇との聖職叙任権争いの副産物として、教皇グレゴリウス七世（在位1073～85）が教皇権の主張を裏付ける法的根拠を探し求めるうちに、偶然ユスティニアヌス法典中の学説論纂を発見した。これによってローマ法の編纂と注解が行なわれ、ローマ法と教会法が盛んに研究され集大成された。使用される法律の文書が一新され、質量ともに増強されると、ボローニャ編年史に名を残す数人の教授が教材と教育形態を一新する。ボローニャは、対立する教皇と皇帝という二つの勢力の地理的中間点にあり、1116～20年頃から自由都市として発展していたことが、大学の誕生と発展の背景にあったという。かくしてボローニャはとりわけ法律学で先端を行ったが、一般教養七科目（リベラルアーツ）のほか、医学、神学などの専門科目も教授した。

高等教育の体制が整うと、ボローニャで学ぼうとする学生がイタリアはもとよりヨーロッパ各地から集ってきた。堀米によると、集ってくる学生たちは家を遠くはなれて頼るのがなく、生活の安全と相互扶助のための組合として《ユニヴァーシティ》を結成した。ユニヴァーシティとは特定グループの集団を意味し、どこの都市にもある同業の組合ギルドを真似たものであって、市民から学生を守ることを目的とする学生の団体であった。それというのも、大量の学生の流入に目をつけた市民たちが、学生の弱みにつけ込んで部屋代をつり上げたりしたことへの対抗措置であり、学生の団体ユニヴァーシティがボローニャ市当局と団体交渉を行って部屋代の引き下げを要求した。彼らは引き下げ要求が通らなければ、他の都市に移ると脅かしたと書かれている。その後も学生らは事あるごとにこの手段に訴えたが、それが脅しとして有効であったのは、当時大学には校舎というものがなく、講義は教師の家や教会、広場や公共の建物のアーケードなど、その都度都合のよいところで行なわれていて、その気になればどこにでも大学を移すことが可能だったからである。実際、13世紀の初頭に発足したヴィツェンツァ、アレツォ、パドヴァ、シエナなどの大学は、学生の集団移住によってできたものだという。

次いで学生たちの矛先は教授たちに向かい、授業の改善などの要求を突きつけた。この場合の闘争手段は授業ボイコットであった。教会付属の学校とちがい、在俗の学校では、

教授たちは学生の授業料だけで暮らしていたから、ボイコットは効き目があった。教授側も早い時点で自営のためにカレッジという組合を作り、同業者の質を落とさぬよう新入者には厳重な資格審査を行なった。この資格審査が学位となったのだが、大学の価値は教員次第であり、各大学が互いに有名な教員を引き抜こうとしたから、ボローニャでは国家収入の半分を大学につぎ込んだこともあったらしい。教授の任用は通常期限付きで、学期ごとの契約さえあったから、大学の講師たちは、俳優のように放浪生活をおくる者が多かった（ブルクハルト p 251）。いずれにしても、ボローニャではずっと学生が大学の主人であり続けたという。

**教師の大学・パリ大学** しかし、学生組合から出発したボローニャなどのイタリアの大学は、大学史の中ではむしろ例外であった。アルプス以北のヨーロッパでは、イタリアの影響を受けたスペインと南フランスの一部を除いて、教育はほぼ 100 パーセント教会・修道院が行ってきており、大学もまた司教教会付属の学校から成長してできたものがほとんどである。その中で最も早く大学になったのが、パリのノートルダム寺院の付属学校であった。ここでは当時の論理学の大家アベラールが教えており、その名を慕って多くの学生が集ったという。学生が増えると寺院内や周辺では手狭になり、寺院やシテ島を離れて左岸に移り、今日のソルボンヌ大学のあるカルチエ・ラタン（ラテン区）が中心となった。パリ大学はボローニャと違って、教師の組合（ユニヴァーシティ）が大学の中心であった。13 世紀の半ばには 4 学部（人文・法律・医学・神学）にわかれていたが、規模からいうと七自由学科を教える人文学部が最大であった。この学部は教養課程に相当し、これを修めなければ専門課程に進めなかったからである。ただし、規模はともかく、パリ大学は教皇や大司教などの高位聖職者を輩出させており、神学部が最重要かつ人気の中心であった。

ボローニャとパリのほかに自然発生的に誕生した大学としては、イギリスのオクスフォードと医学部で有名な南仏のモンペリエがある。13 世紀になって各地にできた大学には、イタリアのボローニャ大学から派生した諸大学の例に似て、パリ大学の学生が四散してできた北部のランス、ラン、オルレアン、シャルトルなどがあり、オクスフォード大学から学生が移転して誕生したのがケンブリッジ大学である。ドイツでは大学の設立はかなり遅れた。（「中世の大学」）

自然発生的な大学とそれらの学生が移住してできた大学のほかに、「創設された」大学もあった。創設された大学というのは、教皇あるいは世俗の権力者によってつくられた大学のことである。これらの大学は、教皇や皇帝・国王が、大学の自発的な発展を容認したり奨励するだけでは満足できなくなり、有用な人材を自ら育成しようとする意図から設立されたものである。言い換えれば、大学が持つ文化的な価値と知的威信だけでなく、実際の有用性と政治的影響力を大学に認めたことの表れでもあった。そうした大学の中で最も古くて著名なのは、フリードリヒ二世がボローニャ大学に対抗して 1224 年に設立したナポリ大学であるが、一般的には、このようにして設立された大学で大きく発展した例は少ないという。ドイツの大学については宗教改革で

大学へはヨーロッパ各地から学生が集まったが、その滞在は性質上一時的だったし、各地の大学を歴訪する学生が多かったから、つねに新陳代謝が行われていた。大きな大学ほど国際性と身分の多様性（貴族の子弟から農民や商人の子弟まで）の度合いが高かった。ただし、国際性が高いといっても、出身地の異なる学生たちとの衝突を常に防ぐことができたわけではなかったため、出身地ごとに「同郷会」ができ、民族色を発揮したり、助け合ったりしていた様子が史料によって明らかにされている。

ちなみに、1300年頃にはヨーロッパ全体で15ほどの大学があったに過ぎないが、1500年には70の大学ができていた p 116。最古のボローニャ大学については、1580年にフランス、ドイツ、イタリアを旅したモンテーニュが同大学を訪れ、その旅日記の中で「大学として私の見た最も立派な建物であった」と書いている。P102。

ヴェルジェの「中世の大学」は、大学の誕生と初期の大学をめぐる諸問題、とくに教皇と各地の司教の相反する利害、教授資格と資格付与の権限、大学の自治や教育内容などをめぐる複雑な問題を解説する。教皇も司教も大学における教育と研究を奨励はしたものの、キリスト教の教義の範囲内での自由しか認めなかった。このことは宗教界、学界をめぐる多くの対立を生み、この時期の知識人たちの知性と思考力を徹底的に鍛え、近代ヨーロッパの基礎を築いていくことになったと考えられる。

**文献と翻訳** 大学が教育と研究の場として発展するためには、そのための教材や文献の充実が不可欠である。キリスト教の神学以外の学問については、当時としては「古代」にしかな手本を見いだせなかったから、大学の発展と古代文献の発掘・翻訳は鶏と卵のような関係にあった。カロリング・ルネサンスと呼ばれる一時期に、大修道院で聖書やラテン教父の著作とローマ時代の一部の作家の著作が翻訳され写本が作られたが、多数の古代ローマの古典、すべてのギリシャの文献が知られないまま埋もれていた。とくにギリシャ語は、ラテン語による古代ローマの文献と違い、西欧ではまったく理解されなくなっていたから、翻訳という作業が必要であった。

古代の文献の発掘・翻訳の面でも12世紀は飛躍の時期であった。「中世の大学」によれば、ギリシャ語の文献は歴史的にスペインで最も早くかつ大量に翻訳されたという。スペインでは10~11世紀にイスラム文化が隆盛を見る一方で、ギリシャを研究する多くの学者が現れ、レコンキスタでキリスト教徒とイスラム教徒との間に幾多の戦争が行われたにもかかわらず、宗教を超えて文化的な絆が結ばれていた。ラテン語、ギリシャ語、アラビア語の3言語ないし、どれか2言語を使用する人（モザラブ人やユダヤ人）が沢山いて、文化の仲介役を果たしたのだという。スペインで作られた翻訳写本は急速にヨーロッパに伝えられ、次いで、ビザンチンと接触のあったヴェネチアなどの北イタリア都市、そして、3言語を実際に併用していたシチリアが翻訳書を多く出した。ヴェルジェによれば、ギリシャ文献の翻訳には、シリア語やアラビア語の仲介的翻訳が介在したものが多くにもかかわらず、1130年から1180年にかけての「最初期翻訳世代」の翻訳は、厳密に逐語的に訳されていて読みにくいものの、きわめて正確であったという。12世紀の翻訳家の努力は、何よ



りもギリシャの哲学と科学に向けられ、アリストテレス、ユークリッド、アルキメデス、プトレマイオス、ヒポクラテなど、数多くの著作が西欧に知られることになった。なお、プラトンについてはアウグスチヌス以来盛んに研究されていたのに、彼の著作が発見されるのが遅れたために数世紀途絶えることになった。

もう一つの主要分野である古代の法律関係の文献も著しく増加したが、文学関係の著作は、この時期には顧みられなかったことを付記しておこう。なお、樺山紘一「異郷の発見」の第Ⅱ部『古代の発見』は、キリスト教化した古代ローマから異教時代のローマへ、そしてギリシャの《発見》へと向かう文献の発掘・翻訳の発展の様子が詳細に説明されている。古典時代のギリシャとは様変わりしていたとはいえ、ビザンチン世界はギリシャ語の世界であり、当時のイタリアにとって、ギリシャ語の習得はビザンチンを経由しなければならなかった。しかし、当時その交流は必ずしも容易ではなかったのである。

**古代遺跡の再発見** ルネサンスは、キリスト教以前の古代のローマとギリシャへの傾倒に始まっている。言い換えれば、ひとたび放棄され失われてしまった古代文化の見直しと、見直しによって生まれた遺跡への関心と探索が出発点であった。中世の巡礼者たちは大挙してローマを訪れたが、彼らが見たローマはペテロとパウロの眠るローマであって、キリスト教帝国になって以降のローマに限られていた。それゆえ、ルネサンス以前にローマを訪れた巡礼者が非キリスト教時代の古代ローマに言及したものは皆無に近いという。

かくて、ルネサンス人のまなざしは、キリスト教化される以前のローマ帝国の栄華に向けられていく。ダンテ（1265～1321）は古典時代のローマを賛美し、「ローマの古城壁は襟を正してこれを見るべし」と書き、「フィレンツェ史」の著者ジョヴァンニ・ヴィラーニ（1275?～1348）は、1300年のキリスト教の聖年が20万人もの教徒を集めて盛大に祝われる様と、その背景に立つ古代ローマの廃墟を眺めていて歴史意識に目覚め、祖国フィレンツェの歴史を書こうと思い立つ。ペトラルカ（1304～74）は、友人ジョヴァンニ・コロンナ（1348年没、枢機卿）と二人でディオクレティアヌス帝の公共浴場跡の巨大な丸屋根によじ登り、古代ローマの廃墟を展望しつつ歴史について語り合った。そのときペトラルカはキリスト教以前の古代ローマを支持し、ジョヴァンニ枢機卿はキリスト教時代のローマを支持した。ファツィオ・デリ・ウベルティ（1305～68）は、ダンテが「神曲」において古代ローマの詩人ヴェルギリウスに案内されたように、紀元3世紀の古代の地理学者ソリヌスに案内される形で、キリスト教以前の古代ローマ市内を訪れる空想物語を書いた（「世界物語」、1360年頃）。そこでは、ぼろぼろの衣服をまとった老女（ローマ自身）が見知らぬ旅人達に栄光に満ちた古代ローマの歴史や、いにしへの凱進行進の模様を事細かに語って聞かせ、七つの丘や多くの廃墟の由来を説明する…。（ブルクハルト「イタリア・ルネサンスの文化」）

**遺跡の発掘と保存：考古学の芽生え** ブルクハルトによれば、1258年頃、元老院議員ブランカレオーネによって、有力貴族たちが所有する140もの堅固な古代邸宅（最もよく保存さ

れてきた建造物群)が取壊わされるという致命的な破壊が加えられて、この時期のローマはすでに数世紀前のローマとは格段に破壊の度が進んでいたという(ブルクハルト p 218)。それでも、当時はまだ今日のような骨組みだけの廃墟ではなく、多くの遺跡が大理石の上張りや化粧張り、円柱等々の装飾も残っていたといわれる。ここにいたって、人文主義者による古代ローマ遺跡の探索と研究が始まる。最初の探究者はポッジオ・ブラッチョリーニ(1380~1459)であった。彼は教皇ボニファキウス9世(在位1389~1404)のもとでローマ教皇庁の書記官になり、イギリスに滞在した1418~23年を除いてずっと代々の教皇のもとで働いた。とくに、1431年にエウゲニウス4世(在位1431~47)の特別秘書に任命されてからは、ローマの隅々を散策して碑文探しに精を出した。ヨーロッパ中の公会議に教皇のお供をして参加し、ドイツの修道院などで古代ローマの文献探しにも努め、彼によって文献と古代遺跡研究とが初めて結び付けられた。ポッジオがカンピドリオの丘に登って周囲を見渡した頃のローマの廃墟は、打ち捨てられて草ぼうぼうの状態、フォロ・ロマーノでは豚が群がって草を食べていたという。続いてフラヴィオ・ビオンドン(1392~1463)がそれまでの研究の諸成果をもとに「再建されたローマ」を著す。彼はこの中で現存する古代の遺跡遺物を叙述するだけでなく、滅びてしまったものを発掘し保存の手立てを考えるなどの事跡から、後世人類初の考古学者と呼ばれるようになった。また、画家で建築家であったラファエル(1483~1520)が、メディチ家出身の教皇レオ10世(在位1513~21)から古代遺跡の発掘を依頼されてその指導に当たり、古代ローマの復元を計画したと伝えられている。かくして、18世紀に活発化する古代ローマ観光の基礎となる遺跡群が姿を見せ始めるのであるが、20世紀の終わりに、EUがヨーロッパ観光の中心に「文化」を据え、共有の文化遺産を発掘・保存・公開するプロジェクト(1997~2000年)を策定したとき、そのプロジェクトの名称を《ラファエル・プログラム》と命名したのもこの実績によるものであることを付記しよう。

ヨーロッパ人に特徴的な自身の歴史への強い関心や文化遺産への憧憬は、対象こそ違え、中世の項で触れた聖墳墓をはじめとするキリスト教の事跡の発掘や保存の努力とも一脈通じるものがあるといってよいであろう。事実、中世の諸都市はそれぞれの市の聖者たちや、教会にある彼らの遺体とか聖遺物を誇りにして大切にしており、それらを求めて来訪する巡礼者を歓迎していたが、やがてルネサンスの偉人たちの故郷であることをも誇りとするようになるのである。

ルネサンス期の教皇には、ニコラウス五世(在位1447~55)やピウス二世(在位1458~64)など、古代ローマの文献や遺跡に学究的関心を有し、発掘や保存に努力し、研究者たちを保護した人たちが多かったことも忘れてはならないだろう。また、人文主義者や聖職者だけでなく、商人の間にも古代の遺産への関心が広まり、商人のチリアコ・ダンコーナは、イタリアだけでなく、古代世界のあちこちを訪れて大量の碑文や古物を収集し、スケッチを描いて持ち帰っている。なぜ苦勞してまでそんなことをするのか聞かれて、彼は「死者を蘇らせるため」と答えたという。(ブルクハルト p 221、222)

## 文学の再生と人文主義

ルネサンス期にはとくに絵画や彫刻などの美術における革新が華々しい。中世では、絵画も彫刻もキリスト教の教義や聖書の内容を民衆に教えることが主たる目的であって、人間や自然を重視した写実主義や陰影による立体感を大切にしていた古代の美術とは本質的に異なっていた。美術作品といっても、教会堂などの建造物の付属品であって独立した存在ではなく、その作品は無個性の職人技による集団の宗教儀礼であった。肉体よりも霊の優越性が前提とされ、人や物を写実的に描くより、わかりやすく説明的でなければならなかったから、描き方にも決まりごとや制約が多かった。これに対し、ルネサンスの絵画は、キリスト教を否定するものではないから題材は同じように聖書に求められたが、絵画を教義的な拘束から解放して宗教的感動の重視へ、画家の独創を重んじる芸術へと発展させていった。チマブエ、ジョットに始まり、ミケランジェロ、ダヴィンチ、ラファエロらによって大聖堂や修道院をはじめとする公的建造物の壁面が飾られ、一般市民の目に強力にアピールした。その輝きは絵画芸術の最高傑作として伝えられ、今も人々の目を楽しませてくれているが、あまりにも有名なルネサンス美術については解説書が無数にあるから、ここでは、現代人からは縁遠くなったルネサンス期の文学の復興と、文字による人文主義の展開についてみておくことにする。ちなみに人文主義とは英語ではヒューマニズム、フランス語でユマニスムの訳語であり、人文主義者とはルネサンス期にローマ・ギリシャの古典的教養を通じて人間形成を図ろうとした人々、言い換えればキリスト教の世界観から解放されて、新しい人間像をもたらした人々である。既述のとおり、古代ローマの地理的継承者であり、非キリスト教世界とも接触のあった北イタリアが先行して多数の人文主義者を輩出したが、ここでは文筆によって表現した人々を取り上げる。

**初期の人文主義者たち：ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョ** ルネサンスは何よりも精神革命であり、生活意識の革新であったから、直接的には言語による表現の自由への動きから始まった。書き言葉のラテン語が主流ではあったが、生身の人間の考えや感情は、日本での「漢文」に相当するラテン語ではなく、日常使用する言語でしか豊かなニュアンスを表現し得なかったから、俗語（日常語）による表現の試みが表現の自由への大きな推進力となった。古代ローマ帝国時代のラテン語は、中世の数世紀の間にそれぞれの地域の言語との相互影響によって変化し、書き言葉のラテン語を共通語として残しつつ、地域固有の言葉としてイタリア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、英語などが発展していく。

俗語を使った文学の始まりは、南フランス（当時はまだフランス領ではなかったが）で誕生したトゥルバドゥール（吟遊詩人）やドイツのミンネジンガー（宮廷恋愛歌人）の宮廷恋愛詩であったとされる。トゥルバドゥールが《男女の恋愛感情》に全く新しい光を当てて賛美したことはすでに述べた。宮廷というごく狭い範囲の文学であり、13世紀末には消滅してしまうのだが、これに啓発されたのがフィレンツェ生まれのダンテ・アリギエリ（1265～1321）であった。アンリ・ダヴァンソン「トゥルバドゥール」（新倉俊一訳）は、トゥルバドゥール文学の大きな功績は、ダンテをして夭折した永遠の恋人ベアトリーチェを歌う「新生」

を俗語で書かshめたことであると書く。他方、ダンテは「俗語論」の中で「トゥルバドゥールは革新者であり、オック語という生きた言語の使用자들이、(俗語で)詩を書く最初の人間たろうと努めた」と書いている。さらにダンテは、ダンテ自身が古代ローマの詩人ヴェルギリウスを案内人として地獄・煉獄・天国を遍歴する壮大な叙事詩「神曲」を俗語で書くことによって失われていた詩神への崇拜を取り戻し、文学に新しい世界を切り開いた(異郷 p 162)。俗語によってキリスト教世界と世俗世界の調和あるイメージをもたらした「神曲」は、のちのミケランジェロやラファエルらのルネサンス盛期の画家たちに数多くの画題イメージを提供したのみならず、もっと後代の美術家たちの創造の源泉ともなったことはよく知られている。ダンテは古代ローマ以来絶えていた詩人としての個人の名声を初めて明確に意識し、求め、かつ獲得した最初のルネサンス人でもあった。ブルクハルトは《個人の名声》は、個性を尊重するルネサンスが生んだ近代性の一つであると指摘しているが、中世では英雄か聖者にしか与えられなかった名声を、一詩人として得た最初の人だったのである。

文学の先駆者ダンテに続いたのがペトラルカ(1304~1374)とボッカッチョ(1313~1375)である。ダンテはフィレンツェの貴族で政治家でもあったが、フィレンツェの政治を掌握する政争で敗れ、40歳を前に故国を追放され、その後二度と故郷の土を踏むことなくほぼ20年間流浪の生涯を送っている。イタリアでは、古代ギリシャにならって月桂冠を授与してすぐれた詩人を称えることを始め、1315年にパドヴァのムッサートが最初にこれを授与されている。ダンテはそれにふさわしい詩人と認められながら、亡命中で果たせなかった。ついで1341年、36歳の若さで華々しくローマで桂冠詩人の栄誉を受けたのが抒情詩人として名声を博したペトラルカであった。ペトラルカは抒情詩のみならず、哲学や歴史にかかわる大量かつ多様な作品を残したが、その中で特筆したいのが散文書簡集である。ペトラルカの「ルネサンス書簡集」(近藤恒一編・訳)の編訳者解説によると、彼は1345年にキケロの書簡集を発見したことをきっかけに、書簡を文学作品とみなし、いつか自分の書簡を自ら編纂しようとの意図を持ち、手紙を送るときはその写しを取って保存し、出した後も推敲を続けていたという。実際に、20歳代末から60歳代までの間に書かれた書簡を自ら4種の散文書簡集に編纂している。その代表的なものが『親近書簡集』(親近な事柄についての書)で、全24巻350通からなり、この時代の重要な歴史的証言となっている。その中で旅行に関連する書簡としてよく知られているのが「ヴァントゥ山への登攀」である。人文主義者と言われる人々はほとんど例外なくよく旅をしたが、とくにペトラルカは生涯旅を続けた人として知られるので、この時期を代表する旅人の一人として後で登場してもらうことにしよう。

ダンテ、ペトラルカと並び称せられたのがボッカッチョ(1313~75)である。ボッカッチョは商人の家に生まれたが文学を志し、ダンテに傾倒して多くの俗語(イタリア語)による作品を残したが、中でも『デカメロン』(10人が10日間1話ずつ話をするオムニバス形式の小説)はヨーロッパ初の散文小説と言われ、14世紀のイタリアの様々な生活を活写するとともに、

「テーセウス物語」や「フィロストラト（トロイヤの物語）」など、ギリシャ神話から題材を得た物語をいくつも取りあげている。さらに、ボッカッチョはデカメロンの中の、パリをはじめとするヨーロッパ各地、アフリカ沿岸、地中海周辺の国々、さらには想像上の国カタイオ（中国）まで、当時知ることができた地理上の世界をほぼ網羅して取り上げている。その点でもダンテの「神曲」の広範な地理的知識と拮抗するものを持っているが、ダンテが空想力で駆け抜けた地底や彼岸や知られざる南半球などは断固として退け、非キリスト教世界やアラブ世界を大きくノヴェッラ（小説）の世界に取り入れていったのである（下巻の河島の解説）。ボッカッチョ自身については、第2部「中世の旅」の「ボッカッチョの商人の旅」ですでに紹介した。ボッカッチョの「デカメロン」は広くヨーロッパの文人に読まれ、チョーサーの「カンタベリー物語」やマルグリット・ド・ナヴァルの「エプタメロン」などは、直接デカメロンを読んで作られた小説である。

**人文主義者とキリスト教** 人文主義者にはキリスト教以前のローマやギリシャの古典に学ぶ姿勢が顕著であったから、必然的かつ画家以上にキリスト教支配のあり方への疑問も生じ、自由な思想を広める結果となった。そして、思想的にはローマよりもギリシャ哲学が重視された。ペトラルカもボッカッチョも、ギリシャ語に関心を持ち、その学びの先駆者ではあるが、ギリシャ語研究に新風を開いたのはロレンツォ・ヴァラ（1407頃～57）であった。ビザンチン帝国がトルコに圧迫されるようになると、ビザンチン学者のイタリアへの来訪・来住が始まり、とくに1453年にコンスタンチノープルが陥落し、ビザンチン帝国が消滅してからは一段と増加して、人々がギリシャ語を学ぶ機会が増えた。ラテン語はもとよりギリシャ語にも通じていたヴァラは、古代文献の原典批判に大きな進展をもたらした。中世を通じて教皇の権力と経済の基盤とされてきた「コンスタンティンの寄進状」（西ヨーロッパ全体をローマ教皇に寄進するという内容で、東ローマ帝国からの独立や世俗権力との争いの中で使われてきた）のラテン語を分析したヴァラが、その用法が古代ラテン語と異なることを発見して偽書であることを証明したことは有名である。さらに、当時の公認ラテン語聖書をギリシャ語の原典と対照して誤訳を指摘するなど、人文学者として功績をあげたが、これらは当然ながら教会から迫害される理由となった。しかし、幸いナポリ王の庇護を受けることができ、のち教皇ニコラウス五世の就任によって教皇庁に登用された。教皇および教皇庁にも人文主義の影響が及んでいたからであった。

イタリアに発した人文主義の潮流は、必然的にキリスト教信仰のあり方ないし教皇を頂点とするカトリック教会の絶対的権威に対する疑問を抱かせ、改革の動きを伴っていく。イタリアでは、フィレンツェのマキャベリ（1469～52）が「われわれイタリア人はとくに不信仰で邪悪である」と喝破して、いち早くキリスト教の習俗と制約から解放されたことを表現したが、カトリック教会への風刺としては、「デカメロン」の第1日の第2話が面白い。お読みになった方はそれほど多くないと思うので、以下に概要を紹介したい。

パリに誠実で実直なジャンノットという織物商がおり、アブラハムという名のユダ

ヤ人の大金持ちと特別な親交を結んでいた。アブラハムも正直で誠実な人柄だった。ジャンノットはアブラハムのような誠実で善良な人物が、キリスト教の信仰をもたないというだけで地獄に落ちるのは非常に気の毒だと思い、ユダヤの信仰を捨ててキリスト教の真実に帰依するよう説得に努めた。アブラハムのほうは、自分はユダヤ教以外に尊く正しい教えがあるとは思わず、その信仰のうちに生まれ育ってきたのだから、その中で生きかつ死んでいくつもりで、この考えは金輪際変わらない、と何度言われても頑なに断った。しかし、ジャンノットがそれでも引き下がらずに熱心に勧めるので、アブラハムは友情に心を打たれたのか、それとも多少とも気が動いたのか、根負けしてこう言った：『そうですか、それほどまでに君はわたしをキリスト教徒にしたいと思っているのですね。それならば、なっあってあげてもいいですよ。ただしその前にローマへ行って、かの地で、君がこの世の神の代理人と呼ぶ方を見ておきたい。その方の暮らしぶりや、その方が兄弟と呼ぶ枢機卿たちの日常をつぶさに調べておきたい。そして、君の言葉と彼らの生活とを照らしあわせ、君たちの信仰のほうが私たちのより優っていると納得ができれば、改宗しましょう。そうでなければ、今と同じようにユダヤ教徒のままにすることにしましょう』と言った。これを聞いてジャンノットはがっかりきて悲しむ。友人の改宗にもう少しで成功しようというところまできたのに、彼がローマに赴いて聖職者たちの腐り切った日常生活を目の当たりにすれば、改宗どころか、たとえ彼がキリスト教徒であったとしても間違いなくユダヤ教徒に戻ってしまうだろうと考えたからであった。そこで、ローマまでわざわざ出かけるのは金もかかるし、聖職者といってもパリにいる人たちとそう違いはないから行くには及ばないと懸命にやめさせようとするが、アブラハムのほうは、ローマに行ってみて決めると決心したのだ、さもなければ二度とこの話はしないでくれ、という。

アブラハムはローマに出かけ、知り合いのユダヤ人たちに歓迎され、教皇や枢機卿、聖職者たちの暮らしを注意深く観察し、人々の話も聞いて次のような感想を抱く。『すべての位階の人間たちが上から下まで等しく乱脈な淫蕩にふけています。女色ばかりか男色にもふけて恥も外聞もないといった有様でしたから、何か重大な儀式をあげようとするときにさえ、淫売婦や美少年の力が幅を効かせていたほどです。誰もかれも一様に食道楽にふけり、酒乱で淫蕩であるうえに、何を措いても野獣さながら、おのれの胃袋の赴くままに行動していることをはっきりと悟りました。さらに注意深く見てゆくと、彼らは皆欲張りで金銭に目がなく、人間の血もキリスト教徒の肉体も、供物であれ聖器であれ、尊い品物も、何もかも金銭で売買されていました。パリでは織物やその他の商品が扱われているように、いやそれよりも活発にいかがわしい商いが行われ、仲介人の数もはるかに多く、公然の聖器売買を《調停》と称し、食道楽を《扶養》とすり替え、言いくるめている始末でした。あたかも神が最悪の魂の者たちの意図にお気づきにならないかのような、また人間同様に呼び名さえ変えれば神も欺かれてしまうかのような振る舞いばかりでした』。こうした所業にいたく傷つけられた

ユダヤ人は、見るべきものは見届けたと思い、パリに戻っていった。

ジャンノットは、彼が帰ってきたと知ると、もはや改宗させる望みは捨てていたが、会いに行き教皇や枢機卿たちや教皇庁の役人たちについての感想を訊いた。『それはひどいものでした。どれもこれも神に罰されるべき者たちばかりでした。君だから打ち明けますが、私が見たものは聖徳ではなく、信仰でもなく、善行や模範的生活でもなく、あるいは聖職者に似つかわしいもの以外のなにものでもなく、淫蕩、貪婪、欺瞞、嫉妬、傲慢といった類のものばかり、いやもしもこれ以上のことがこの世にあるとすれば、そういう悪事ばかりでした。…私の目には、あそこは神の司る場所というより、悪魔の仕事場と映りました。キリスト教徒を世界から追い出す悪魔のような彼らの行いにもかかわらず、キリストの教えは着実に広まり、一層の輝きを増していくさまをみて、以前にはどんなことがあってもキリスト教徒には帰依するまいと思っていましたのに、今はどうしてもキリスト教にならないではいられない気持ちになりました』。そういつて洗礼を求め、パリのノートルダム寺院に赴き洗礼をうけたのでした。

**北方の人文主義者：エラスムスとトマス・モア** イタリアで起こった新風は間もなく北方へも伝わり、様々な形でカトリック教会の腐敗や墮落を批判する勢力が誕生する。南ドイツ生まれのヨハン・ロイヒリン（1455～1522）は、ドイツとフランスの大学で学んだあとイタリアにやってきて若き天才ぶりを発揮し、ギリシャ語の師アルギュロスピスに「ついにギリシャがアルプスを越えた」と感嘆せしめた。彼は、のちにマルティン・ルター（1483～1546）が火をつける宗教改革において重要な役割を果たすことになる。フランスでロイヒリンに当たる役割を果たしたのがルフェーヴル＝デタープル（1455頃～1536）であった。パリ大学で学んで僧籍に入り、ギリシャ語にもヘブライ語にも堪能であった彼は、人文主義的研究法を聖書にも適用し、聖書自体を古典として扱ったのであった。

オランダのエラスムス（1469～1536）とイギリスのトマス・モア（1478～1535）は、後世への影響の大きさにおいて人文主義者の双璧とされる。二人は親友であり、訪ね合う仲であり、作品についても相互に影響し合っている。二人の代表作「痴愚神礼賛」（エラスムス）と「ユートピア」（トマス・モア）は、ともに15世紀末から16世紀初め頃の世情への痛烈な風刺であるが、その行き方は正反対である。「痴愚神礼賛」（渡辺一夫・二宮敬訳）のほうは、エラスムスがギリシャ語の痴愚・狂気を意味する *Moriae* をもじって痴愚の女神を創造し、この女神に自慢話をさせる形で諧謔の中に世情を縦横に批判してみせる。たとえばこんな調子である。「…この商人も、この兵士も、この判官も、山のようにたくさん奪ったものから取り除いた、ほんのわずかなお金を供物にしさえすれば、レルナの沼（ヘラクレスが七頭の蛇を殺したとされるギリシャの沼）のような彼らの生涯をいっきよに浄められると思ひ込み、一片の献金と引き換えに、偽誓、淫乱、泥酔、乱闘、殺人、詐欺、不実、裏切りの償いができるつもりでいる…」とか、戦争については「…敵味方双方とも得より損をすることになるのに、なにがなんだかわけがわからない動機から、こんな争いごとをやり始めること以上に阿呆<sup>あほう</sup>なことがあるでしょうか？…中略…戦争のときには、あまりものを

考えず、前へ前へと突進する肥って脂ぎった人間が入用なのです…。エラスムスはカトリック教会の腐敗墮落を辛辣な筆で批判する一方、ルターらのプロテスタントの支援要請を断って、両陣営から批判され、晩年は孤独に過ごしている。

トマス・モアの「ユートピア」（沢田昭夫訳）も時代の世情を批判するのは同じだが、ユートピア（理想の国、どこにもない国の意で、モアの造語）を提示することによって、現実世界の欠点を浮き彫りにしようとする。同書は2巻からなり、第1巻では、エラスムスの弟子格のペーター・ヒレスと博学の士ラファエル・ヒュトロダエウスなる人物を創造し、モア自身を含む3人の対談によって当時のイギリス社会や内政の批判が展開される。第2巻がユートピアへ旅行して観察した理想社会を描き、それによって現実との乖離を浮き出させようとした。たとえば宗教の扱いは、ユートピア国ではきわめて寛大で、布教に暴力を使う宗教か無神論・唯物論でもなければ、様々な信仰が許されている。ユートピア国の王は世襲ではなく、老巧な人々に指導される人民によって選出された人々の政治であることを暗示する。端的に言えば、時代の悪弊と見られるものすべてを裏返しにしたものを集めて、理想国家のイメージをつくってみたというわけである。

時代はまさにヨーロッパ諸国が封建制度から脱皮して、それぞれ王権を確立していこうとする時期であり、他方、カトリック教会は何世紀も権力の座にあって様々な病弊を露呈していた。1517年にマルティン・ルターがウィッテンベルグ教会の玄関に95か条の提題を掲げて正面からカトリック教会に挑戦するに至って、カトリック教会も急速に寛容さを失っていく。「痴愚神礼賛」（1511年）も「ユートピア」（1516）も1520年以後だったら、このような内容では出版できなかったであろうといわれる。事実、教会を批判したとはいえ、敬虔なカトリック教徒であったトマス・モアは、英国王ヘンリー八世に重用されながら、王が離婚問題にからんで英国国教会をカトリック教会から独立させようとしたとき敢然と反対し、大逆罪に問われて1535年斬首の刑に処せられてしまう。エラスムスもルターに同調せず、カトリック教会の僧籍にとどまっていたが、死後1558年に教皇パウルス四世によって第一級の異端者と断じられた。

ただし、人文主義者たちはカトリック教会の精神的支配に異議を唱え、腐敗墮落を批判はしても、カトリック教会自体を否定することはなく、いわんやキリスト教という信仰にまで疑問をもつことはなかった。

## 宗教改革：プロテスタントの登場

カトリック教会の精神支配から脱していくルネサンス運動とは別に、教会の腐敗墮落を批判し、内部から改革する動きも起こっていた。1000年続いた教会の支配システム自体を否定するに至るプロテスタントの宗教改革の震源地はドイツであり、ウィッテンベルク大学の若き神学教授マルティン・ルターの95か条の提題（1517年）が引き金になった。当時のドイツは一つの主権国家ではなく、神聖ローマ帝国と呼ばれる300余の領邦と自立度の高い帝国都市の連合体であった。聖俗7名の選帝侯が皇帝を選ぶのが建前だが、事実上



ハプスブルク家が帝位を世襲していた。このことは、帝国内の支配権を強化しようとする皇帝と、領邦国家であろうとする諸侯とが何かにつけて対立する構図を生んでいた。言い換えれば、ローマ教会との間に宗教的な紛争が起これば、ローマ教会の守護者を自任する神聖ローマ皇帝対諸侯の政治的闘争に結びつきやすい状況にあったのである。

内部からの宗教改革への動きは、イギリスのオクスフォード大学教授ジョン・ウィクリフ（1320 頃～1384）やその影響を受けたヨハン・フス（1370 頃～1415）らが反ローマ教会的な論説を唱えたことに始まっている。ウィクリフは死後 12 年たってから異端の宣告を受け、墓をあばいて亡骸を川に投げられ、フスのほうは捕えられて火刑に処せられた。それでも様々な形で教会改革運動は北部ヨーロッパを中心に広がっていった。 p 26

ローマ教会に対する正面きっての挑戦の発端は、ローマのサンピエトロ大聖堂の新築費用ねん出のための贖宥状（免罪符ともいう）の販売であった。この事業は選帝侯でもあったマインツのアルベルト大司教に委ねられ、財閥フッガー家と組んだ贖宥状の販売がドイツではじまった。贖宥状というのは、12 世紀に誕生したとされる「煉獄思想」（煉獄とは地獄に行くほどの罪を犯していない人々が、天国へ行くまで罪障を償う場所）にもとづき、生きている人の行いによって、亡くなった近しい人たちの煉獄での罪障償還期間が短縮される（生者の執りなしという）という考えがあり、それを金銭の寄進で贖えるとするものであった。贖宥状の販売の実行者となったドミニカン派の僧侶テツェルは次のように触れて回ったとされている。

「…考えてみるがよい。後悔し、懺悔し、寄進料を払いさえすれば、誰でも罪障の許しが得られるのだ。お前たちの親しい親戚や友人が、お前たちに哀訴しているのが聞こえないかね。『わたしたちを憐れんでくれ、わたしたちは恐ろしい苦しみにあっている。ほんのわずかな捧げもので、お前たちは私を買い戻せるのだ。』 ……お前の父親は息子に、母親は娘に、いったい何と言っているかね。『わたしはお前たちに生命をやり、育てあげたすえに財産を残してやった。ところがお前たちは、まだわずかな値段でわたしを救い出すつもりもないというのか』。お前たちは、あの人たちを助け出せるのだということを、よくよく思い出ささい。」（「近代への序曲」 p359）

松田智雄の解説によれば、身分によって寄進すべき額が大体決められていて、上のようなわかりやすい説得口調で町々をめぐり、巨額の金額を集めていったという。こうしたカトリック教会のやり方にドイツの人文主義者たちは激しく反発した。

## ドイツの人文主義者たち

14、15 世紀にイタリアで最初に花開き、フランスやフランドルをはじめ多くの国々がイタリアの影響をうけて、この時期ルネサンス美術がそれぞれの固有の文化の中に固有の花を咲かせていたのに対し、ドイツではいわゆる美術のルネサンスらしいものはほとんどみられない。影響らしいものが及んでも、つかの間に消えてしまい、例外はルネサンス後期の画家アルブレヒト・デューラーが独り聳立しているのみである。ドイツの場合、ルネサンスは芸術抜きでドイツ人文主義という形で定着した。あるいは、キリスト教の純化を求

める方向と、知的自由を求めるルネサンスの思想は相容れないものであったというべきかもしれない。ノルベルト・オーラー「中世の旅」によれば、大学誕生以降の14世紀から16世紀にかけて、たとえばパッサウ司教のうち8名、マイセン司教のうち4名、ドルパトでは3名がボローニャ大学の卒業生であった。大学では聖職者と俗人の対立はなく、精神的に自由な雰囲気の中で大胆かつ新しい思想を貫くことも可能であった。大学におけるこうした交流の成果が、ルターの95か条提題の掲示とその後の論争の土台をつくり、中世とから近代への移行の道筋をつくっていったのである。

人文主義は、神に対する人間の復権を標榜することによって旧来の教会の絶対支配への疑問を提起するようになったが、それらがラテン語によるものである限り、一握りのエリート運動にとどまらざるを得なかった。ダンテに始まりペトラルカやボッカッチョらによって俗語の文学が始まっていく一方で、中世そのものである教会制度に正面から敵対する異端の運動は、俗語を駆使する反逆的な説教者の口を通じて、圧迫されていた民衆の間に根を下ろしていく。

**ルター登場** マルティン・ルター(1483~1546)は中部ドイツの農民の家系に生まれたが、父の鉱山での成功で少年期から教育を受けることができ、1501年には当時ドイツ第一といわれたエルフルト大学に入学する。1505年に172人中2位の成績で修士になり、人文学の講義を受け持つかわら法学を学んで将来を嘱望されていた。それが突然友人たちに別れを告げ、俗世を捨ててアウグスチヌス修道会に入ってしまう。厳しい修道生活を経て1507年に司祭になり、さらに25歳の若さでザクセン選帝侯が1502年に設立した新しいウィッテンベルク大学の人文学の教授として招かれる。

1510年、修道会の配慮で憧れの聖地ローマへ旅する機会を与えられ、勇んでローマに向かう。しかし、ローマへの旅は、ルターにカトリック教会の腐敗の実態を見せ、真の信仰に向かう決意をさせることになる。「近代への序曲」の記述を借りると、旅は次のように展開する。長いが引用する。

…ルターは古都ニュルンベルク、それからドナウの河岸の美しい町ウルムを過ぎ、西スイスを通ってアルプスを越え、ミラノを過ぎてポー川を越えた。彼はこのアルプスとアペニンを兩岸とする《楽しい流れ》に感激し、フィレンツェに入ったが、彼はダンテにも、ミケランジェロにも何らの興味をひかれなかったらしい。ルネサンスの世界と宗教改革の世界はここで鋭く対立している。ルターがフィレンツェで興味を示したのは設備の完備した病院であった…。

やがてローマの手前の最後の峠を越えると、そこは「永遠の都」、そして「聖なる都」ローマが横たわっていた。前面にはティベル川が銀色に輝いていたのである。ルターはひざまずき、両手を掲げて「ようこそ聖なるローマよ」と叫ぶ…。

ルターが憧れたのは、ルネサンスのローマでもなければ、古代のローマでもなかった。古代のローマ遺跡を眺める機会もあったはずであるが、それはただ異教的な伝説

と結びついて、彼の興味をほとんど呼び起こさなかったどころか、むしろ反感さえ覚えたようである。1 か月の滞在中彼は修道士として当然の厳しい生活態度を守った。…ところがルターが厳しい生活態度を守れば守るほど、イタリアの僧侶の不信仰が明らかになり、その生活の腐敗ぶりもわかってきた。そればかりでなく、ローマそのものが不潔な都であって、そこには売笑地域があり、僧侶さえそこを訪れていることを知った…。

ローマの旅から帰国した翌 1512 年、彼は博士号を得て神学部の教授へと進み、さらにウィッテンベルクの二つの教会（城教会と町教会）の牧師も務めることになった。彼の講義や説教は、熱情と表現の適切さと聖書解説の深さで学生や市民の人気を博した。聖書講義の中で彼は次第にローマ教皇庁を非難するようになり、1516 年には次のように書いている。「(ローマ教皇庁は) まったく退廃し、病毒におかされており、考えられる限りの淫乱、食道楽、詐欺、権勢欲、神を誹謗する冒瀆の混沌である。ローマは異教時代の帝政期におとらず贅沢な食道楽にふけている。」(p 355) ルターはイタリアのルネサンス文化や人文主義にまったく興味をもっていなかったために、その陰の部分しか見えなかったのである。

とはいえ、ルターは信仰者であり学者であって、革命家ではなかった。1517 年の万聖節の前日(10月31日)に、付近までやってきた贖宥状販売の行列に対抗して、城教会の扉に「贖宥状のまやかし」を訴える《95 か条の提題》を張り出したのも、神学論争のつもりだったからラテン語で書かれていた。ところが、提題はドイツ語に訳され、印刷されて飛ぶように人々の手に渡り、瞬く間に改革者ルターの名が広まっていった。神学者エックとの論争に誘導されて、公会議の無謬性を否定し、ローマ教会の最高権威を否定し、平信徒と聖職者に本質的な差異があることをも否定した。押されるように次々に教会批判の書を刊行し、思想は次第に先鋭化していく。ローマ教会も見過ごすことができなくなり、1521 年に破門宣告を発し、皇帝カール五世もルターの帝国追放を命じる。ルターの説教はドイツの人文主義者や中産階級以下の層にも熱狂的に受け入れられる一方で、人文主義者エラスムスと対立するようになる。ルターの説教至上主義を彩る反知性的な姿勢に愛想をつかさず人々も現れ、宗教改革とキリスト教的人文主義が袂を分かち事態になっていく。

ドイツに発した宗教改革運動は、教会から聖像を追放し、修道院を否定し、牧師の妻帯を認め、ついにはローマ教会から断絶し、独自の教会組織を樹立するところまで進む。彼らはカトリック教会にプロテスト(抗議)する者と呼ばれ、スイスではツウィングリが、次いでカルヴァンが宗教改革派のリーダーとなり、やがてネーデルランドやフランス、そして英国にも浸透していった。間もなく改革派は、同じキリスト教の神を信じながら、ローマ教会と分離してプロテスタント派(新教)(フランスではユグノーと呼ばれた)を誕生させるのである。

宗教改革派は概して北ヨーロッパに広がり、カトリック教会を支持するイタリア、スペイン、フランスなどの南ヨーロッパ諸国と対立する。思想家どうし、宗教家どうしの対立が世俗権力と関わる中で、新教と旧教の広範な対立から宗教戦争にまで突き進んでいくこ

とになる。ヨーロッパを一つにしていたキリスト教が二派に分裂したことは、ことが信仰に関わるものであるだけに、こののち近代化に向かえば向かうほど、両派の抗争は激しく、17世紀を戦争の世紀と言わしめるほどの戦乱の世をもたらしたのであった。

**印刷術の発明** 印刷術の発明は羅針盤、火薬と並んでルネサンス期の三大発明とされる。知識と教育の普及に印刷物が果たした役割は極めて大きい。印刷自体は木版印刷など古くから行われてきた方法もあるので、ここでいう印刷術の発明とは、活版印刷による書物の刊行を指す。それまでヨーロッパで印刷術が発展しなかった理由は、ひとえに紙がなかったことにつきるといふ（原種行 p 172）。ルネサンス前まで紙の代わりに用いられてきたのは羊皮紙であった。羊皮紙は非常に丈夫で特許状などの重要書類を作成するには適するが、大きさがまちまち、高価で数量に限りがあったから、印刷に使用するなど問題外であった。ヨーロッパに紙の製法がもたらされ、15世紀の半ばにドイツ、イタリア、オランダでほぼ同時に活版印刷が導入されたらしいが、一般にドイツのグーテンベルクが発明者とされている。それは彼が、①溶融した鉛・アンチモンの合金を鋳型に注入して作った活字を組んで活版をつくり、②活版を紙に印写するために機械的な力で押し付ける木製のプレス（印刷機）を使用する、③水性インクでなく顔料を油で練った印刷用インクを用いる…、この3つの過程を総合的に行う工夫をしたのがグーテンベルクであったからである（平凡社百科事典）。ともあれ、グーテンベルクによる最初のラテン語聖書《42行聖書》（詩編）が印刷されたのは1456年頃とされ、初期の刊行物は圧倒的に聖書をはじめとする宗教関係の書であった。

一般信者は、聖職者から口頭で教えを聞くだけにとどめて文字を読ませず、聖書の翻訳を禁じていたカトリック教会に対し、信仰に教会の媒介は不要と主張するプロテスタント派が活版印刷の力を最大限に利用しようとしたのは当然の成り行きであった。

### カトリック教会の対応：トリエント公会議

カトリック教会側の対応は、プロテスタントへの対策を協議するトリエント公会議（1545年から1563年まで断続的に開催）の開催によって進められた。1551年に始まった第二会期では、プロテスタントとの決定的分裂を避ける道を探るため、道中の安全を保障してプロテスタント代表のオブザーバー参加を呼び掛けるなども試みたが成功せず、それ以降の議題は、《カトリックの教義の正当性の再確認とプロテスタント側の主張の否定》および《カトリック教会の自己改革》の二つに絞られた。

宗教改革の先駆的な動きは13世紀に南フランスで興り、ツールーズのアルビ派やリヨンのヴァルド一派などは、のちのプロテスタントの主張と変わらぬ激しい反教會的な信仰を主張していた。これを放置できないと見たローマ教会は、北フランス軍を主力とする世に言うアルビジョア十字軍を派遣し、20年に及ぶ弾圧によってこの時の宗教改革運動を壊滅させるのに成功した。その結果、以前はあまり厳しくはなかった異端審問を徹底させ、厳

しい取り締まりを行うようになっていた。にもかかわらず、宗教改革の震源地であったドイツとスイスでは、カトリック教会は自力でプロテスタントに反撃できず、旧教会を守るための反撃の拠点になったのは、レコンキスタを戦い続けてきたスペインであった。スペインは15世紀の半ばから激しい異端審問を制度化し、宗教裁判を始めた大審問官トルケマダ（1420～98）によってユダヤ教徒もイスラム教徒も壊滅させられた。ルター登場後も新教（プロテスタント）の影響はほとんど及んでいなかったから、新教派は簡単に制圧された。ローマ教皇が本格的に対応に乗り出すのはパウルス三世（在位1534～49）になってからで、1542年異端取り締まりのための中央機関として6人の枢機卿からなる「聖庁」が設立される。イタリアでもプロテスタントは一掃されていたが、それは明らかにスペインの制度をモデルにした制度であった。異端審問との関連で忘れてはならないのは、トリエンツ公会議で禁書目録を作成することが定められ、思想統制のために図書館やアカデミーは手入れを受けて書籍を廃棄させられ、禁書目録がつけられ、教会当局の許可のない印刷物は印刷を禁じられたことである。だが、このような強権的な統制でカトリック教会の復興が可能だとは思えず、ドイツやフランスのカトリック諸侯の反発を受け、禁書目録はイタリアやスペインでしか機能しなかった。

**イエズス会** その意味で、真にカトリックのために奮闘したのがイエズス会の人々であった。イエズス会はバスク地方の貴族出身のイグナチウス・デ・ロヨラ（1491～1556）と彼のパリ大学の仲間たちによって創立された。ロヨラは1521年にパンプローナ（ナバラ州の州都）での対仏戦で脚に重傷を負い、武人としての栄光を諦めると同時に、療養中に「黄金伝説」（聖人伝説）を読んでキリストの戦士となる決意をする。1522～23年にかけて「霊操」を書き、28年には勉学のためにパリ大学に入学する。ちなみに「霊操」とは、ロヨラが創案した《身体を鍛えるように魂を鍛える》やり方を体系的に整理したものである。パリには7年間滞在するが、この間に若い学寮仲間に対して霊操を指導し、彼自身の激しく燃える神への想いを燃え移らせた（「イエズス会の歴史」p13）。スペインで得ていた仲間は脱落していったが、パリの学寮で得たピエール・ファーヴル（1506～46）、フランシスコ・ザビエル（1506～52）、ニコラ・ボバディリア（1508～90）ら6人の仲間とともに、1534年モンマルトルの丘において小さなグループを結成し、聖地エルサレムへの巡礼行を誓約した。聖地巡礼はヴェネチアで待機するも、オスマン・トルコとヴェネチア間の緊張が高まるなどして果たせず、ローマへ行って教皇の指示に従うこととした。わずか7人の学生（のち3人加わって10人）によってスタートした知的小集団の熱意と行動が、新旧宗教対立の中で時のローマ教皇パウルス三世（在位1534～49）の信任を得て、1540年ロヨラを総長とする修道会として認可された。彼らは、イエスに全てを捧げる者の集まりとしてイエズス会を名乗ることとした。

近代世界における救霊活動には、一般教養という武器が必要である（中公小p469）。パリ大学の知的エリートたちを中心とするイエズス会士は、一方で新教に対抗する理論的支柱になるとともに、自らの修得のみに甘んじず、世俗に身を投じて救霊のための実践活動

に身を挺していく。教育を重んじ、各地に学校を建て、非キリスト教世界への献身的な布教活動に邁進した。その中で最もよく知られた例が、創立メンバーであったフランシスコ・ザビエルのアジア布教であり、これは後述する。初代総長ロヨラが 1556 年に没したとき、すでに会のメンバーは1000名を数え、その管区は遠くブラジルから日本にまで及んでいた。さらに、1574年にはイエズス会士数 4000 名、最盛期の 1624 年には 16,000 名を上回っていたという（「近代への序曲」 p 471）。

### 3. 14～16 世紀の旅

中世を通じてヨーロッパ全体がキリスト教によって一つにまとまり、ヨーロッパ中いたるところに置かれた無数の聖堂と修道院を統括する扇のかなめにローマの教皇庁があった。東・南・西（イベリア半島）のイスラム勢力と対立することによって、ヨーロッパであることの認識が明確化したのも中世であった。ルネサンス期にいたってもヨーロッパ域内の交通は相変わらず不便であったが、ローマ帝国時代の公道の遺物もあって、商業の発展とともに商業路がヨーロッパ各地を連絡するようになり、こうした商業路を通して、次第に聖職者も商人も巡礼も、より頻繁に旅をするようになっていた。聖職者と商人の旅についてはすでにふれたので、ここでは中世後・末期に登場した新しい旅人達の様子を見てみよう。

中公小 p 206 参照

なお、この時代は、ヨーロッパ人がヨーロッパの外の世界へ飛び出していった時代でもあり、世界化（グローバリゼーション）の始まりの時期でもあった。マゼラン艦隊による世界一周の成功（1522 年）まではすでに述べた。その後はトルデシリアス条約による世界分割の取り決めによって、中南米ではスペインが、アジア地区ではポルトガルが独占的に活動するが、やがてオランダ、イギリス、フランスが世界貿易と植民地争奪戦に加わって世界を拡大していく。本章ではヨーロッパ内の旅を扱い、マゼラン後の世界の海への展開は次章でまとめて扱うこととする。

#### 学生の遍歴と放浪

中世後期 12 世紀に大学が誕生すると、学生たちは優れた師とよい稼ぎを求めて各地を旅して歩くようになる。もっとも、大学ができる前にも学問を志す若者が旅に出る慣行はあり、ノルベルト・オーラー「中世の旅」は、オスナブリュックのベンノーという人物が 1040 年頃、学生の習いにしたがって遍歴の旅に赴き、よその町々を訪れた様子を紹介している。彼は遍歴中に行く先々で地位の高い貴族の知己を得ようと努力し、その努力は往々にして報われる。結局ベンノーは出世してオスナブリュックの司教座につくことができ、そのことによって例外的に遍歴時代の記録を残し得たのであった。

大学生たちの遍歴についても、前節で引用した 3 つの文献がそれぞれ項目を設けて説明しているので、ざっと紹介しよう。阿部の「中世の旅」によれば、学生の遍歴は旅といっても無銭旅行に近く、街頭で歌を歌っては人々から喜捨を受け、時には農家の鶏を盗んでは森の中で焼いて食べた。中世では学生の大半が神学生、すなわち聖職者の卵であったか

ら、喜捨する側もいずれ聖職者になる若者に敬意を表し、喜捨することによって自分の魂の救済になると信じていた。放浪学生たちは姿こそぼろをまとい、一銭の金も持たなくても、世の権威に反抗しているという意気は軒昂であった。しかも、やがては聖職者になって人々の救済のために働くという意識が高かったから、喜捨を受けるのを当然視し、卑屈に思うことは全くなかったのだという。また、「近代への序曲」の島田雄次郎の記述によれば、中世末期には大学の数が 80 に増え、大学は所属人の国籍も身分も問題にしなかったから、学生も教授も大学から大学へと自由にヨーロッパ中を遍歴した。中には血気盛んで野放図な連中もおり、仲間をつくって放歌高吟する者たちも多かったという。彼らが歌ったラテン語の歌を同書が紹介しているので、再掲させていただきます。

この街道を俺はっ走る  
これが若者の流儀というものさ  
原罪などに縛られたり、  
信仰だ、真理だ、考えるのはまっぴら  
すこやかな魂などより、正真正銘、  
快樂のほうにずっと執心。  
ありがたいのはこの俺様の肉体、  
お慈悲のありかを間違いなさるな。

この学生歌謡をラテン語から英訳したジョン・アディントン・シモンズは、これを題して「酒と女と歌」としたが、これもまた「敬虔な」中世の一面だったと解説している。学生がこの調子なら教授のほうにも相当ハメをはずす者がいたことも頷ける。15 世紀中ごろのフランスの放蕩無頼の学士詩人フランソワ・ヴィヨン（1431?~63）はその最たる例であろう。

とはいえ、やはり学生の旅も大多数の人びと同様危険だった。とくに名門出の者や教会の聖職録をうける金持ちの学生は搾り取れる〈かも〉と見られたし、少年時代から大学へ行ったので、世間知らずでたやすく犠牲になった。彼らの旅の状況や、危険に対してとられた予防措置などはほとんど伝えられていないが、学生たちも 2~10 人程度の小グループで旅行するのが常であったし、余裕ある者は大学の所在地まで息子に召使や家庭教師をつけてやったのだという。

オーラーは、西欧の大学史にとって貴重な記録を残した皇帝フリードリヒ一世（バルバロッサ）が、1158 年に一種の感動をもって学生たちについて語った言葉を紹介している。オーラーの記述をそのまま引用する。

《学問愛から故郷を棄て、金持ちから無一物の貧者になり、あらゆる危険にわが身を晒し、自分に過ちがなくともきわめて卑しい人から — それは耐え難いことだが — 肉体的危害を受けてもよく耐えた》。それゆえ、皇帝は、《学問のために異郷を旅するすべての学生に》貴重な特権を認めた。《…彼らの学問により世界は照らされ、部下の

生活は知的に洗練される」と。学生自身とその召使が学問する場所への途上《何の煩いもなく旅し、かの地に住んでよろしい》。《余の耳にしたところによれば、誤った慣習法から時おり行なわれるようだが、同国人の借金のために学生たちに損害を与えることはまかりならぬ。》

この文の後ノーラーは、13、14、15世紀は大学設立のラッシュであり、大学が増えることによって（神聖ローマ帝国内ではまずウィーン、ハイデルベルグ、ケルンにできた）、学生たちは長途の旅をせざるにすむようになったとし、これらの配慮のねらいは、国土改造の対策としてだけでなく、学生の旅行欲（並びに金銭の流出！）をせきとめ、学問内容と教師の招聘に影響を及ぼすことによって、芳しくない自由の刺激を抑える試みだったとも取れると書いている。それでも中世末には数千人の学生が旅に出ており、学生登録者の数は1400年から1500年の間に6倍にもなったという。

**トマス・プラッターの遍歴旅行** そうはいつても、放浪学生自身が残した旅の記録は乏しいのだが、よく知られたものに「放浪学生プラッターの手記」（阿部謹也訳）がある。トマス・プラッター（1499?～1582）は、マッターホルンの麓のグレッヒェン出身の人文主義者として著名なスイス人であるが、若い頃遍歴の旅に出た折の記録を残している。著者のまえがきによると、息子フェリックスとすでに高名になっているかつての弟子たちのたつての頼みにより、1572年1月28日に始めて16日間で書き終えたとある。同書によってその概要を見てみよう。

伝記は3部に分かれ、第一部「さすらいの日々」で生い立ちと《ひよっこ》（学生が自分の世話をさせるために連れて歩く少年を指す）としてのさすらいが書かれ、第二部「労働しつつ、学びつつ」では、徒弟として働きながらの放浪学生の生活が語られる。第三部は教授となり、名声を得ていく物語である。時代の背景は宗教改革の時代で、ツウィングリが指導するスイスの新旧宗教紛争のさなかでもあり、彼自身がプロテスタント側に立っていく過程も述べられている。

トマスは山村の農家に生まれたが、父はもの心つく前に亡くなり、母は再婚する。末っ子だったトマスは伯母の家に貰われ、6歳になると山羊飼いとして働かされ、山岳地で80頭の山羊の番をさせられ、何度か死ぬ思いをした。その後牛飼いに雇われたが、伯母のはからいで9歳半くらいの頃、老司祭のもとで文字を学ぶことになった。しかし、司祭は何も教えてくれないばかりか、やたらに殴る人だったため長居せず、ウルムやミュンヘンの大学に行っていた放浪学生の従兄弟パウルスが帰郷してきた機会に、〈ひよっこ〉として一緒に放浪の旅に連れて行ってもらおう。おそらく10歳であったと思われる。ひよっことしてのさすらいの旅は、日本人には想像もつかない旅である。放浪学生は子供を連れ歩くと喜捨がたくさんもらえることをいいことに、ひよっこたちに乞食をさせてはそれを取り上げ、分けてはくれず、ひよっこは始終ひもじい思いをしながらついて回るのである。トマス自身、自分がパウルスを養っていたようなものだと書いている。パウルスにくっついて故郷



を出てから5年間一度も故郷に帰らずに、今日の国名でいえばスイス、ドイツ、フランス、オーストリアを放浪する。パウルスは行く先々で放浪学生たち7~8人で行動し、トマスも他のひよこたちとともに様々な体験をさせられる。鶯鳥を盗んで矢を射かけられて殺されそうになったり、ひもじさに犬と餌を奪い合うといった悲惨な放浪生活が淡々と語られる。当時スイス人はヨーロッパでは人気があり、トマスたちは歓迎されることも多かった。時にはやさしい婦人に助けられ、養子に望まれたりもする。5年が過ぎて一度故郷に帰るが、またすぐに放浪に出る。長ずるに及んでパウルスのわがままに我慢ができなくなり、彼から逃げ出して独立する。シュレットシュタットで初めて学校に入り、ラテン語を初歩から学ぶが、すぐにまた放浪の旅に戻る。すでに18歳になっていた。

第二部は標題のとおり、綱造りの職人の徒弟となって働きながら、暇を盗んではヘブライ語とギリシャ語を独学で勉強する。ツウィングリの信奉者になって新教側の伝令のような役割も果たしながら、知り合ったツウィングリやエラスムスから、よい職業を紹介するから厳しい労働に明け暮れる職人をやめてはどうかと勧められても綱造りをやめなかった。このことについて、阿部は「労働の尊さ」を説いたツウィングリの影響だと言っている。遍歴学生と遍歴職人の両方のような生活を送っているのだが、同じような遍歴学生が常時数千人も動いていたというから、15、6世紀のヨーロッパでは彼らが社会に受け入れられ、一般の人々が学芸のために多くの寄進をしたことを示している。言い換えれば、スイスの素朴な農夫の息子にも、学問への憧れを芽生えさせるに足る何かが生まれていたのである。(解説 p 202)。

トマスはチューリヒで出会った終生の師ミコニウスのすすめで結婚し、故郷で子供相手の学校を開いたりもするが、再びチューリヒに戻り、カッペルの戦いでツウィングリが死んだからはバーゼルの学校で助手になり、ついには大学教授にまで昇進した。

L.フェーヴルは「フランス・ルネサンスの文明」の第2章「知の探究」の中で、この時代の学問への情熱を称え、独学者たちの経歴の凄さの例としてこのプラッターの自伝をトップに挙げ、詳細に解説している。そして、この事例が例外的な事象ではなく、《学ぼうという英雄的狂気》に全身とりつかれた人物にこと欠かない時代だったといい、他にもいくつか事例を挙げている。P48

## 人文主義者の旅

ルネサンス期の旅の記録として残されているのは、新しい時代のリーダーたる人文主義者(ヒューマニスト)たちのものが多い。彼らは学問と教養と人的交流のために多くの旅をし、文筆によって多くの記録を残したのであった。中でも、ルネサンスをリードしたペトラルカ、ボッカッチョら先駆をなした多くのイタリアの人文主義者たち、イタリアに憧れた北方のエラスムス、ラブレー、モンテーニュらは始終旅をしていた。彼らは古代のギリシャ・ローマ時代の学者のように、好奇心にまかせてヨーロッパ内を旅してまわっている。本項では、彼らの旅が活発化していく背景にも目を配りつつ、そのいくつかを紹介し

よう。

**ペトラルカと旅** ペトラルカ（1304～74）は人文主義者の中でも最も多く旅をした人のひとりである。本人が書簡で《自分はこれまでの全生涯いつも旅の空で過ごした》と言っており（オーラー「中世の旅」 p 396）、書簡などによって多くの旅の記述を残している。ペトラルカは亡命中のフィレンツェ市民の子として中部イタリアのアレッツォに生まれ、1312年に、父とともに当時教皇庁が所在した南フランスのアヴィニョンに移っている。大学は南フランスのモンペリエで市民法を学び、さらにボローニャで法律学を修めたあと、父の死によってアヴィニョンに戻る。法律家として生計を立てる道を選ばず、アヴィニョンの枢機卿のもとで義務の少ない聖職禄を受けて教皇庁に仕官したが、この頃からすでに古典への関心が高く、人文主義者としての基礎を固めていた。その後桂冠詩人として名をなし、イタリア各地はもちろん、ドイツ、フランス、フランドル地方などへ度々旅行して古典の収集や発掘に努めた。

**ペトラルカのドイツへの旅** オーラー「中世の旅」によれば、ペトラルカは枢機卿ジョヴァンニ・コロナ（友人であり主人でもある人）宛ての書簡でドイツとフランス旅行の印象をまとめている。この書簡の中でペトラルカは、自分にとって異邦人や異郷との出会いは「サンチャゴ巡礼案内書」が述べているような、偏見を強めたり敵意を呼び起こすようなことはなかったと書いている。巡礼書が述べている偏見や敵意というのは、簡単にいえば、自分の国に比べて異なっていたり遅れているように見える他国の国情や慣習を馬鹿にする態度のことである。たとえば巡礼案内書の筆者は「…カスティリア地方の人間について一言述べれば、彼らは邪悪で悪徳に満ちている」と書き、ほかでも訪問地の住民をひっくるめてけなすのは一例や二例にとどまらない。彼には他国の人間の彼らなりの生き方を認める気持がなく、自分の故郷で当たり前とされていることに反するものを何でも排撃する。著者は北フランス出身だから、トゥールからポアトゥに至る地域の人々は頑健で戦士にふさわしい姿をし、弓矢を巧みに操り、輝くばかりの顔と巧みな弁は衆に抜きんでる…とべた褒めするが、南下するにしたがって批判的になる。はじめは沿道の住民の言葉を嘲っているが、次第に彼らの生き方にまで腹を立てるようになり、次々と悪口を並べるようになっていく（p 302～）。愛国的な旅人にありがちな態度と言えればそれまでだが、ペトラルカはこういう一方的な旅人の見方とは反対に、自分の故郷と異なる蛮族の礼儀作法、町の美しさ、男性の品位、女性の優美さなどに驚き、賛美している。アーヘンで温泉を楽しみ、ケルンでは大勢の女性がライン川で水浴するのを感嘆して絶賛する。ケルンからフランスのリヨンにまわり、出し続けてきた書簡は8月で終わっている。近藤恒一編集・訳の「ペトラルカ書簡集」にはこの書簡が訳出されていないので細部は分からないが、オーラーの紹介部分だけでもペトラルカのみずみずしい感性がうかがわれる。

**ペトラルカの風景美発見** 旅の間も常に沢山の書簡を書き、それらを自ら編纂して出版したことは既述のとおりだが、ここで紹介したいのは「ヴァントゥー山への登攀」である。

ヴァントゥー山というのは、ペトラルカがしばらく住んでいたアヴィニョンから 20 km 程のカルパントラという町にほど近い標高 1912m の起伏の激しい山である。この山に 1336 年 6 月、弟と従者ひとりをつれて登った理由や登山の過程が、友人のパリ大学神学教授あての手紙に細かく書かれている。「ルネサンス書簡集」（近藤恒一訳）に収められているこの手紙によると、この山はどこからでも眺めることができ、ペトラルカはリヴィウスの「ローマ史」で、マケドニア王フィリッポスが、ハイモス山（ハイモスは山脈の意で、今日のスターラー山脈を指す）の山頂に登ればアドリア海と黒海の両方を一望できるという噂を信じて登頂したという記述を読み、ハイモスは無理でも、せめてヴァントゥー山に登って眺望を楽しみたいと登攀を思い立った、と書いている。谷間で年寄の羊飼いに会い、危険で無意味だから思いとどまるよう懸命の説得をうけるが、ペトラルカの意思は固かった。この羊飼いは 50 年前に自分が青春の情熱に駆られて試みて大変な目にあったのだと話す。結局一行は苦難を乗り越えてついに頂上に到達し、その時の感慨をペトラルカは次のように書き送ったのであった。

最初、ただならぬさわやかな大気、ひろびろと打ちひらけた眺望に感動し、私は呆然として立ちつくしました。ふりむいて見わたせば、足下には雲があります。アトスやオリュンポスの山々について聞いたり読んだりしていたことを、さほど有名でないこの山で目のあたりに見て、いまやそれも信じたくなるほどです。それから、どこより心ひかれるイタリアのほうへと視線をめぐらしますと、雪におおわれた峻厳なアルプスの連峰が、じっさいは大変な距離なのに、間近に迫って見えるのです。

現代のわれわれが読めば、格別の感慨を覚えるほどではないが、当時としては画期的な描写である。中世ヨーロッパの自然観は、創世記の記述「…生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物すべてを支配せよ」と神は人間に言われ、さらに、全地に生える種を持つ草と種を持つ実をつける木をすべて人間に与えられたと書かれている。中世人にとって、人間の手の入らぬ野生のままの自然は美しいどころか、危険で恐ろしい場所ではなかった。北方のゲルマン民族は、本来その風土固有の自然のうちに存在する靈気を認識する力を生まれながらに備えていたはずであるが、キリスト教に強いられて、長年のうちにそれまで敬ってきた泉や山、湖や森の中に存在する靈の存在を感得する能力を喪失してしまったのであった。ルネサンスの絵画においても、自然が書かれるのは前面の人間の営みやその成果物の遠くにある背景に過ぎず、自然美を独立して描くことはなかった。自然美が真に評価されるには、ルソーの登場する 18 世紀を待たなければならないのである。

ペトラルカの《ヴァントゥー山登攀》を、自然と人間という文脈で初めてとりあげたのはブルクハルトであった。彼は「イタリア・ルネサンスの文化」第 4 章「世界と人間の発見」の中で『風景美の発見』という項目をもうけ、ペトラルカが「風景が敏感な魂に及ぼす意義を、完全に、かつこれ以上ない断固たる態度で証言した」とその功績を称え、古代

以後このような実用目的をもたない登山を行った最初の一人であろうと言い、知られる限り、登山の行程の記録を残した最古の人であろうと言っている。

**ローマへの旅** ペトラルカは中部イタリアで生まれ、アヴィニオンで育ち、モンペリエとボローニャの大学で学び、上述のとおり 1333 年にはドイツ、フランス、フランドルにも行っているが、その時点までローマには行く機会がなかった。「ルネサンス書簡集」IV（二つの憧憬：ラウラとローマ）およびV（ローマの再発見）とその解説によれば、ジョヴァンニ枢機卿の弟でペトラルカの親友のジャコモ・ジョヴァンニ司教が 1333 年にローマへ行く計画であることを知り、古典文学を熱愛し、ローマに憧れていたペトラルカは同行を申し出て許されていた。ところが、ローマの政治情勢の急変でジョヴァンニはペトラルカを待たずにローマへ発ってしまい、この時はローマ行きの機会を失った。それから 3 年後の 1336 年 12 月（6 月にはヴァントゥー山に登攀）、ジョヴァンニからローマへの熱情は見せかけだったのかというからかいの手紙を受け取ると、年末には行くこと返事を書いてすぐさまローマへ向かっている。ペトラルカのローマ滞在は数か月に及び、廃墟と化しているローマ市街を訪ね歩いている。書簡Vは、廃墟を見ればローマへの熱情は薄れるのではないかと心配してローマ行を勧めなかったジョヴァンニ枢機卿に宛てたものであるが、短い文章ながら廃墟のローマを見て感動し、いっそう心酔するようになったと書き送っている。無数の人々が巡礼としてローマを訪れ、同じ遺跡を目にしていたであろうに、そのほとんどの人はペトラルカの感動とは無縁だった。ペトラルカの感動と心酔の背景には古代ローマ世界の歴史と文化への豊かな知識や深い理解があり、それこそがペトラルカの感動の源泉なのであった（近藤恒一）。

なお、ペトラルカを師とし友とした同時代のボッカッチョ（1313～1375）も、始終旅をしていたが、ボッカッチョのほうは、デカメロンをはじめとする市民生活の描写の中で旅の辛さや、当時の旅館のありさまなどを描いていることは中世の旅籠の項で紹介したとおりである。

**エラスムスと旅** ペトラルカより一世紀ほど後の北方の名高き人文主義者エラスムス（1466 頃～1536）も生涯にわたって旅に明け暮れた。世界の名著「エラスムス／トマス・モア」に掲載されている年譜をたどってみると、毎年のように旅に出ていることがわかる。エラスムスは 1466 年頃、司祭だった父の私生児としてロッテルダムに生まれ、1483 年頃 15 歳のときに相次いで両親を亡くし、親族の計らいで共同生活団の経営する寄宿学校（スヘルトーヘンボス）に送られ、ついで 1487 年、デルフトに近いステインにあった聖アウグスチノ修道会に入れられる。ここで司教叙階をうけると、成績優秀だった彼は当時大司教座教会があったカンブレーの司教秘書に抜擢される。1495 年にパリ大学に入学し、モンテギュー学寮に入っている。貧しかった彼は勉学のかたわら家庭教師を務め、その縁で 1499 年にイングランドに行き、多くの知己を得た。ジョン・コレット、トマス・モア、ヘンリー王子（のちのヘンリー8 世）などである。翌年パリに戻り、その後オルレアン、ルーヴェア

ン、ブリュッセル、アントワープなどを転々とし、1506年にはパリを経て念願のイタリア行きを決行する。トリノ、ミラノ、ボローニャからフィレンツェまで行き、1507年から09年にかけてヴェネチア、ローマを訪問し、同年6月にローマを発ってロンドンに向かっていくが、この時のアルプス越えの道中で「痴愚神礼賛」の構想を得たとされている。ロンドンでは親友トマス・モアのもとに滞在した。

エラスムス「対話集」の中の《旅籠に関わる対話》は中世の「宿泊施設」の項で紹介したが、同じ対話集に旅というものの魔力について語ったものが、L.フェーヴル「フランス・ルネサンスの文明」（二宮敬訳）の第一章「時代の中の人間」のV項『旅こそ人生』で紹介されている。世界の名著「対話集」の翻訳にこの話は含まれていないので、L.フェーヴルの記述をそのまま引用する。

ここで、16世紀を対象とする歴史家すべての枕頭の書のひとつ、ささやかながら内容充実したエラスムスの『対話集』を開いてみよう。今しも四人の男、まともに結婚し、立派な職を持ち、一戸を構えて穏やかに暮らしている町人が四人、夕方になって古馴染み同土酒を酌み交わしている。少々飲み過ぎの気味さえあり、葡萄酒で頭がかつかとしてくる。一人が唐突に言いだす。「俺が好きなら一緒にどうだ…。ガリシアの聖ヤコブ様までお参りに行くぞ」。酔払いの突然の発作だ。するともう一人がすっと立ち上がって、「この俺はサンティアゴ・デ・コンポステラにゃ行かないね、ローマへ行くぞ！」。残る二人がなだめにかかる。まず最初に、ガリシアの果てなるサンチャゴへ行こう。そこからローマへ回ろうじゃないか…。俺たちもいくぜ。そこで四人は大杯になみなみと葡萄酒を満たし、順に回し飲む。固めの杯だ。定法どおりに誓いが立てられた以上、後へは引けぬ。杯は飲乾されぬ、旅立たんいざ、である。そこで一同は出発した。さてこの四人の巡礼のうち、一人はイスパニアで死んでしまい、もう一人はイタリアで死ぬ。三人目はフィレンツェで重病の床に伏し、彼と別れた最後の一人だけが一年後に、疲労困憊し、老け込み、尾羽打ち枯らして戻ってくる…

空想ででっち上げたクロッキー、と読者はお考えかもしれないが、断じて然らず、これこそ当時の…われわれとは遠く離れてしまった当時の慣わしなのだ。

エラスムスはここで、一般市民の間でさえ命をかける冒険行への衝動が見られることを語り、フェーヴルはこのような未知への行動が時代精神であったと言っているのである。

**アルブレヒト・デューラーの旅日記** ルネサンスから宗教改革にかけての時代、人文主義者であれ宗教家であれ、人々は始終旅に出かけているが、旅そのものについて書き残しているものはごくわずかしかない。その中で異彩を放っているのが、画家デューラー（1471~1528）による「ネーデルラント旅日記」（前川誠郎訳）である。

旅日記に入る前にデューラーの生涯年譜を旅中心に辿ってみると、1471年、金細工師（のち出版事業者）の次男としてニュルンベルグに生まれ、父のもとで修業したが、彼の心はむしろ絵画にひかれていた。父はそれを残念がりながらも、版下画家のミヒャエル・ヴォー

ルゲムートのもとに徒弟奉公に出してくれた。徒弟奉公を終えると、1490年から94年にかけてバーデン、アルザス、スイスなどへの遍歴の旅に出る。コルマールの画家のもとで働く予定であったが、到着すると同人がその直前に死亡していたため、その兄弟の金細工師らのもとでしばらく働く。その後、ストラスブールを経て当時ヨーロッパの出版事業の一大中心地であったバーゼルに滞在し、ここで早くもS. ブラントの「阿呆船」などに挿絵を描いて好評を博している。1494年(23歳)、ニュルンベルクに戻ってみると、親族によっておぜん立てができていて結婚するが、新妻を残して同年第一次イタリア旅行に出かけている(～95年)。この時は馬に乗り、インスブルックからブレンナー峠を抜けてトレントに出、ミラノ経由ヴェネチアへ行っている。旅の途中の自然の風景を水彩画やデッサンで描いているのが興味深い。というのも、既述のとおり、この時代までヨーロッパの画家で自然景観を主とする絵を描いた人はデューラー以前には見当たらず、その後も長らくヨーロッパでは自然景観主体の絵画は描かれていないからである。たとえば、画集に見る「木立の間の池」「ヴェールシュ・ピルク(イタリアの山)」などは水彩画であるが、まさに自然景観のみを描いた珍しい作品である。この時のヴェネチア滞在は1年ほどだったが、先進的なイタリア絵画の基本を学び、ベリーニほかの著名な作品を模写し、多くの知己を得て1495年春にニュルンベルクに帰った。ニュルンベルクではザクセン選帝侯の知己を得て作品を発注してもらえるようになり、とくに版画の制作に力を入れ、有名な《ヨハネ黙示録》を1498年に完成している。

1505年の夏の終わりに二度目のイタリア旅行に出かけ、翌年の1月まで、今回も主としてヴェネチアに滞在しつつ、パドヴァやボローニャに足を伸ばしている。憧れのフィレンツェとローマにも行きたいと友人への手紙に書き残しており、習作のひとつに《ローマにて》の記載はあるが、実際にはローマまでは行けなかったらしい(千束伸行)。故郷の友人ビルクハイマーに宛てた10通の手紙が残っており、これらによれば、デューラーはヴェネチアで名声を得、多くの芸術家や商人との付き合いの中で優雅に過ごしているさまが窺える。

さて、「ネーデルラント旅日記」は1520年41歳の時の旅で、同年7月12日にニュルンベルクを立ち、20日ほどかけて8月2日にアントワープに達し、アントワープを拠点にフランドル地方を回遊してからアーヘンでカール五世の戴冠式に出席し、1年後の7月にケルンまで帰着している。日記はケルンで終わっており、ケルンからニュルンベルクへの帰途は記載がない。旅への出発時、画家の名声はすでに高く、皇帝の通関手形をもらい、行く先々で知人や賛美者の世話を受けながらの旅であった。通常の旅人では受けられない待遇を得た旅であったが、その日々の記録は《出納簿日記》といわれるほど毎日のすべての支出を書き入れており、それがメインのような日記である。「ネーデルラント旅日記」(前川誠郎訳)にはニュルンベルクからケルンまでと、ケルンからアントワープまでを中心とするネーデルランド(今日のオランダとベルギー)内の旅の2枚の旅程図が添付されていて、旅の経路がよくわかる。ニュルンベルクからフランクフルトまでは、本来メイン川を船で

行けば簡単だが、川旅は高くつくので集団をつくり、護衛をつけて陸路を行った。フランクフルトからケルンまではメイン川を利用し、マインツで船を乗り換えてライン川を船で下り、ケルンからアントワープへは再び陸路を取っている。日記の内容に旅人としての感懐などはまったく書かれておらず、毎日の支出内容の羅列が主内容だが、これ自体が当時の物の値段にかかわる詳細な資料となっている。印象的なのは持参した通関手形がきわめて有効で、毎日通関手形で無税通関ができたことが念入りに記され、多い時には1日のうちに5度も6度も通関手形を見せている。この時期、市や町が旅人から通行料を取っていたことをうかがわせるが、デューラーは通常の荷物のほかに贈答用の大量の作品を持参していたから、とりわけ手形なくして旅は困難だったであろう。

そもそもなぜデューラーがこんな大旅行を敢行したかといえば、マクシミリアン皇帝のために凱旋門や肖像画を描き、以後年金100グルテンが約束されていたにもかかわらず、同皇帝の死によってそれが危うくなり、後継皇帝となったカール五世になんとか年金を継続してもらうための行動であったという。前帝マクシミリアンの孫のカール五世はスペイン王家を継承（カール一世）後、フランスのフランソワ一世と神聖ローマ皇帝位を争って勝ち、ドイツ、オーストリア、スペイン、ネーデルランド、ブルゴーニュを領有するのみならず、スペイン王として広大な海外領土をも支配する最高の権力者として君臨していた。デューラーはアーヘンでの戴冠式に出席するつもりで、新帝ゆかりのネーデルラント（幼少時代を過ごしている）を訪れて、人脈を新たにしようとしたらしい。この旅日記は、人と会った記録と金銭の支出の明細ばかりで読んで面白いものではないが、資料価値は高い。実際、交通費や食費、宿泊費はもとより、自分の買い物のいちいちを書きとめ、贈り物としてもらった物の値踏み、チップの額までもらさず書き込んでいる。あちこちに移動しているから様々な異なる通貨が出てくるが、訳者解説で日記に出てくる順に18種類の通貨が列記され、訳者は貨幣価値と交換率を勘案し、書かれている500年昔の物の値段を今日の日本円に置き換える推定を行ってくれている。これによると、アントワープの宿泊費が1か月11グルテンとあるのは今日の日本の価格でおおよそ55万円相当、1日当たりにすれば18,000円ほどになるという。彼が泊まった《天使城館》という宿は、当時ヨーロッパを代表する貿易港であったアントワープの一流ホテルであったから妥当であろうという。ローストチキン1羽（12ペニヒ）が2000円に相当し、一般に食費はリーズナブルで、様々なサービスに対する謝礼（チップ）は内容次第だが、普通2000円くらい払っている。

現代に比べて最も割高なのが交通費であった。たとえば、マインツからケルンまで150kmほどのライン下りの傭船代が3グルテン（≒15万円）、同じくケルンからアントワープまでの馬車運賃が3グルテン、帰途ブリュッセルからケルンまでの馬車代には実に10グルテン（≒45万円）も支払っている。移動中の安全も考えると、近代ツーリズムが鉄道の開通をもって始まるとされるのが当然のことであるのがよく理解できる。

日記の内容自体は支出の記録が主であるから面白みがないのは当然だが、前川によれば、デューラーはこの旅の間中、銀筆とペン用の2種類のスケッチブックを持参して旺盛な芸

術活動を展開していて、日記の中で制作に言及している箇所が140か所にものぼるといふ。500年後の今日、そのうち100点の素描と3点の油彩画が残っている。このうち日記の記述と符合するものは7点のみだが、ネーデルラント滞在中に応接した人たちに木炭やチョーク、絵筆などで大判の紙に描いて手渡した肖像画が別に10点ほど残っている。前川はこれらは奇跡的に残ったものであり、実際には140点に数倍する作品が描かれたであろうと推測する。出納簿という当時の生活を反映する記述とともに、こうした素描や板絵の存在によって「旅日記」が比類ないドキュメントになっているのである。

日記の記述は箇条書きのような淡々たる記載で、アーヘンにおけるカール五世の戴冠式についても、ひとこと「私はこの世に生きる何人もこれよりさらに壮麗なものを見たことがない盛儀の一切を目にした」と書いてあるだけである。それでも、具体的な人名を挙げ、何をし、いくら支払ったなどという記述を読んでいくと臨場感に溢れる行動が浮かんでくる。そうしたごく短い記述の中に、一か所だけ突如としてデューラーが感情を露わにしている箇所がある。それは1521年5月17日の分であり、ルターが陰謀によって逮捕されたという報せを受けた時の記述である。《ルター哀悼文》と題されたこの記述は文庫本の7ページに及ぶ長文である。デューラーはルターが処刑されたのではないかと心配し（実際は追放されただけだったが）、切々たるルターへの思いを吐露し、「彼こそはキリストと真のキリスト信仰の後継者であった」とまで言い、エラスムスに対して、真理を守り、手を差し伸べてくださいと訴えている。

なお、この日記の原文は失われ、写しだけが残ったものであり、その事情も訳者によって詳しく紹介されている。

#### 4. 観光旅行の芽生え

デューラーの旅日記を読み終わり、関根秀雄訳「モンテーニュ旅日記」を読み始めた頃、フランスの観光研究家マルク・ボアイエ氏がそれまでの多くの著作の集大成として「総合観光史」*L'Histoire Générale du Tourisme* を出版されたことを知った。彼にはすでに「観光の誕生」*L'Invention du Tourisme* (1966) という著作があり、1492年のコロンブスのアメリカ発見の年を近代の始まりと見、同年以降16世紀の中ごろまでを《観光前史》とし、モンテーニュの旅日誌とシャルル・エティエンヌの観光ガイドブックの刊行をもって観光の誕生としていた。総合観光史を取り寄せて読んでみると、観光の始まりはやはり16世紀の半ばとし、この時期に観光旅行はブーム状況にあったことを多くの文献で立証している。そのあと、時代が進んで17世紀の半ばから18世紀の半ばまでの約一世紀を観光の停滞期としている。興味深い考察である。本項では、ボアイエの「総合観光史」の記述を大いに参考にさせてもらおうはずである。

#### 初の観光旅行者モンテーニュ

デューラーのネーデルラント旅行から30年後の1550年、フランスのミシェル・モンテ



ーニュ（1533～1592）がフランスの西南端ボルドー付近の居城を出発してパリへ行き、そこからドイツ、オーストリア、イタリアへの1年半に及ぶ旅を行い、その旅日記が残された。ルネサンス末期の記録として残された数少ない旅日記のひとつである。デューラーが職人の息子から身を起こしたのと違って、モンテーニュはフランス西南部の裕福な貴族の家庭に生まれた。父ピエールは若くしてフランソワ一世のイタリア遠征に加わった武人であり、イタリア・ルネサンスの開花に親しく接し、いわば日本の明治維新期の洋行帰りにも比すべき新知識の持ち主であった。フランスは1494年、シャルル八世がナポリ公国やミラノ公国の継承権を主張してイタリアに侵攻して以来、長期にわたりイタリア戦争を戦っていた。戦争に出かけてイタリア人が開花させたルネサンス文化に触れ、感動と憧憬の心を抱いて帰国してきたフランス人は多かった。その一人であったピエールは、教育熱心でもあり、新規な方法でミシェルを教育したことで知られている。中でも、ラテン語に通じてはいるがフランス語はまったくわからないドイツ人をあえて息子の家庭教師に雇い、6歳まで家族の者にもミシエルの前では一切ラテン語しか話させなかったという。かくして幼少期から古代語であり学問用語であったラテン語に親しんだことが学校に入って役立ち、明治期の日本人が横文字や西洋文化に抱いたような劣等感を持たずに古代の文化に接することができた。

モンテーニュの旅日記は、書かれてから182年後の1774年に古櫃の中から発見されたもので、有名な「随想録」とちがって文章も飾られておらず、素顔のモンテーニュが観察されるし、この時代の旅の模様を生き生きと伝えてくれる。

**旅日記：旅程の概要** 関根秀雄・斉藤信広訳「旅日記」によって旅の概要を見てみよう。行程は1580年6月から翌1581年の11月までのおよそ1年6か月の旅である。同行者はモンテーニュを最年長者とする5人の貴族にそれぞれの従者が付き、さらに荷物運搬用の騾馬引きなども一緒だから総勢20名近い人数になったであろう（荒木昭太郎「モンテーニュとの対話」）。旅は一部をのぞき馬に乗って行った。行程は後述のとおり、ボルドー近郊の居宅からパリを訪ね、そのあとドイツ、スイス、オーストリアを経てイタリアへ向かう。モンテーニュは生まれつき旅が好きで、フランス国内は公私にわたって度々旅をしているが、外国に行くのはこの時が初めてであった。彼はこの旅の2年前に腎臓結石の最初の発作に見まわれ、度々湯治場で温泉治療を受けている身だったから、この時の旅では行く先々で温泉場に泊まっており、日記にも自身の病状の変化や鉱泉の泉質特効、治療法に関わる話題が多い。

記者解説によれば、日記は発見された時にすでに初めの数ページが失われており、書かれていたであろう旅の目的や準備の様子は不明だが、1580年6月22日にパリに向けて出発し、出来上がったばかりの「随想録」初版を国王アンリ三世に献上し、その足でドイツ、イタリアへの長旅に出たことは「随想録」の記述からわかっている。初めの3か月分ほどが欠けており、パリ滞在を終えて、9月5日パリ北方ボーモンからモーMeauxへ向かうところから記述が始まっている。モーから南東方向のプロンビエール（著名な温泉地）へ向か

い、ミュールーズからスイス国境の町バーゼルに入る。10月1日にバーゼルを発ち、バーデンからコンスタンツ湖を経てアウグスブルク、ミュンヘンなどを訪れ、インスブルックからブレンナー峠を経てイタリアに入る。11月1日にヴェローナに到着し、ヴィチエンツァ、パドヴァを経て11月5日ヴェネチア着、12日まで滞在する。そのあとフェラーラ、ボローニャ、フィレンツェ、シエナと辿り、12月1日にローマに到達している。ローマには4月19日まで4か月半長期滞在しているが、イタリアに入ってからここまで、ヴェネチアに8泊した以外はせいぜい1〜2泊ずつの駆け足旅行である。最初のローマ滞在時にはオステリアやティボリを訪れている。4月19日に中部イタリア遍歴の旅に出て、東海岸のロレート、アンコーナ、セニガリアをめぐり、そこからフィレンツェを経由して西海岸のルッカやピサを訪れ、6か月後に再びローマに戻っている（10月1日）。2度目のローマ滞在は2週間ほどで切り上げて帰途につき、ピアチェンツァ、トリノ経由モンズニ峠を越えてフランスに戻り、あとはほぼ真西に故郷に向かい、1581年11月30日に城館に帰宅している。1年6か月に及ぶ旅であった。

この間、日を追って日記が書かれており、前半の記述は家僕（今でいえば有能な秘書か）がモンテーニュに代わって主人の行動や感想を代筆しているが、ところどころモンテーニュの意見が入っているところを見ると、記述内容は本人が見て納得していることが窺われる。なお、家僕の執筆は最初のローマ滞在の前半までで、2月16日の分からはモンテーニュが直接執筆している。理由は書かれていないが、ローマで家僕に暇をやり、これまでよく書き継いでくれたのでやめるわけにもいかず、自分が続けるとして後半を書き始めている。

**世界初の観光旅行** 訳者解説の言葉を借りれば、旅日記に「随想録」の著者としての文学的、哲学的な省察を期待しても無駄で、「…主としてそこに読まれるのは、旅程のこと、旅宿の設備、名所旧跡の見物、旅での各種の物入り、病人の食餌箋、とくに地方的に珍しい献立、訪れた温泉の泉質と特効、病状の変化に対する詳細な自己観察、工夫を凝らした器械・装置、その他各土地で見聞する卑俗な瑣事の簡略な記述ばかりで、人間の内面生活や諸人物または諸国民の思想や感情に触れたものはほとんど見当たらない」。

これを言い換えれば、湯治の行動を含め、過去の記録にはなかった本格的な観光旅行の趣がある。第一に、旅の目的が《楽しみのための旅＝観光》であり、他に特別の目的がない。事実彼は「…道中で不慮の死に見まわれることも、用務を帯びて冬の最中にグリゾン地方（スイス東部の山岳地）を旅する人たちにはよく起こる。だが、わたしは多くの場合楽しみのために旅をするのであるから、そんな不幸な目にはあわない。右の道が面白くなければ、左の道を取る。馬に乗るのが大儀な場合は逗留する。…あとに何かを見残したら、その時はすぐに後戻りをする…」(p84) と言っている。したがって、行き先や日程もかなり自由で、たとえば、10月19日にアウグスブルクを去る際、ここから一日行程でドナウ川が見られ、岸边の町ウルムに行ける、さらに、もう半日でザウアーブルンネンという温泉もあり、バーデンのような行き届いた宿屋もあって大変贅沢な待遇が受けられると皆が語るのを聞いて心が動くが、冬の季節が迫っていること、方向が逆でまたアウグスブルクまで

戻ってこなければならぬのがつらい、と書いて諦めている。モンテーニュは同じ道を二度通るのは嫌いな性質でもあり、迷った結果取りやめにしたのであった。

そうかと思えば、北部イタリアで、魚が美味しいと評判のガルダ湖を見たとすると、急に思い立って、お供を連れず主人たち5人だけで貸馬をとばし、昼食をしに行ったりする（ガルダ湖行きは後述）。日記を読み進めると、馬とマイカーの違いはあるが、結構気の向くままに行く先や見どころを選び、旅を楽しんでいるさまは、現代のわれわれのドライブ旅行の趣がある。モンテーニュの旅が観光旅行的である理由の第二は、彼が小領主としてブドウ園を経営しており、時間の余裕と金銭的余裕を考えて旅行していることである。「私の遍歴の最大の悩みは、自分の気に入ったところがあったらそこに居を定めるという決心をもって出て行けないこと、やはり世間一般の考え方に従って、帰ってくる気を出かけなければならないことである」（p70）といい、別のところでは「わたしは、ただ余ったお金、たまったお金を旅費にあてたので、そのために時期を待ったり延ばしたりした。わたしは遊山の楽しみのために家にいるときの楽しみを犠牲にしたくない。そうではなく、両方がお互いに補い助けあうことを望んでいる」と書く P14。多くの人文主義者たちが、所に縛られず、定職を持たず、師を求め、友を求めて自由に居を定めたり移動していたのとは違い、〈戻ってくる予定で旅に出るツアー（回って戻ってくる意）を行う人＝ツアーリスト〉であることを明快に宣言した最初の人といってよいであろう。ただし、ツアーもツアーリストもこの頃にはまだ概念も言葉も存在してはいなかったのであるが（この点は第4部で取り上げる）。

### モンテーニュと旅

モンテーニュは旅が好きで、旅そのものについて最も多くを語った文化人でもあった。物事を多面的に観察し、辛辣な見方を披露することの多い彼が、こと旅に関しては留保なくその必要性和効用を称えている。

《モンテーニュと旅》は昔からモンテーニュ研究者の間でも注目されてきたテーマのひとつで、関根秀雄「モンテーニュ逍遥」第6章『ジャンティヨム・フランセから〈世界の市民〉へ：無の思想家が異国漫遊の間に体得したもの』や、荒木昭太郎「モンテーニュとの対話」第4章「未知の世界へ」などが扱っている。これらを手引きにモンテーニュが語った旅への想いの言葉をもう少し追ってみよう。彼が旅に関わる集中的な考察を行っているのは「随想録」第3巻第9章である。そして、「旅日記」はいわばその実践の記録で、日記の中でも当然旅に関わる考察は多い。以下、すでに紹介した旅に関連する言葉のほかに、モンテーニュの言葉としてよく引用される言葉を紹介しておこう。

### 旅への憧れ

- 「見知らぬ珍しい物事に憧れる心こそ旅に出る理由である」（第3巻9章）第7巻P10  
この文の前に《人間の性分にはいろいろあるが、なかでかなり一般的なのは、自分のものよりもひとの物を喜び、変動と変化を愛するという性分である。私もその仲間である》とあり、好奇心が強く未知の場所にはどこへでも行ってみたいと述べている。

## 旅に求めるもの

- 「自分自身に満足し、自分の知る美しい形よりも美しいものを認めない人たちは、われわれより賢明だとは言えないが、たしかにわれわれより幸福である。」

せっかく面白いもの美しいものを見聞しても、見慣れたものや許容できるもの以外は認めない人たちがいる。これでは心を乱されることなく平穩無事ではあろうが、進歩も成長もないという。この点については、「旅日記」でも自分の見方や習慣を離れられず、自国と異なる外国の風物になじみず蔑視する旅人をたしなめている。

- 「私が旅を企てるのは帰ってくるためでも、目的地まで行きつくためでもない。ただ、動き回るのが面白い間動き回ろうというだけなのだ。いや、歩きまわらんがために歩きまわるのだ」 p70

この言葉は、そんな年でそんな遠くへ行ったらとても生きては帰れますまい、という言葉への答えとして語られている。このあと、「わたしの旅程はどこで区切ってもよい。それは大きな期待をもって立てられてはいない。その日その日が旅の終わりなのだ」と続けている。

## 旅の教育的効果

- 「旅はためになる修業である。旅以上に良い教育法があるとは思われない」 P183

もう少し詳しく引用すると「魂は旅で未知・新奇な物事に会い、不断の鍛錬を受けるのだから、人に人生を学ばせるには、絶えずその人に多くの人々のさまざまな生活、思想習慣を見させ、われわれ人間の性質は不断にその形態を変化させてやまないものであるということに悟らせる以上に、よい教育法があろうとは思われない」と書いている。

- 「人間の本性がいつも多様なかたちをとって現われることを、旅に出た先で自分によく味わわせてやる以上に、人生をつくりあげるのに良い学校を私は知らない」。

## 外国旅行

- 「異国を訪れることは大変ためになる。よその国民の人情や風俗を見てくるため、われわれの頭脳を他の国民のそれとこすり合わせながら磨き上げるために旅に出そう」

この言葉は随想録第1巻第26章(p56)にある言葉で、この章全体がさる貴婦人に答えて子息の教育方法について述べたものである。グランドツアーを先取りしたような言葉であるが、旅は旅でも「我が国の貴族たちがしているように、ただ、サンタ・ロトンダの周囲が何歩あるかとか、リヴィア姫のバンティーがどんなに豪奢であるかを見てくるためでもなければ、また、ある人たちみたいに、どこそこの廃墟にあるネロの顔はどこそこのメダルに刻まれた彼の顔よりどれだけ長いとか広いとかを見てくることはありません」と言い、ただ行けばよいというものでもないことを皮肉な調子で付け加えていることも付記しておこう。

- 「わたしはわが国の人々があの愚かな感情におぼれて、自分たちと異なる習慣に食ってかかるのを見ると恥ずかしくなる。…どこへ行っても自分の習慣にのみなじみ、よその習慣を毛嫌いする。ハンガリアで一人の同国人に出会えば、彼らはその偶然に狂喜する。さっそく一緒になって目の前の野蛮な風俗をくさしにかかる。…彼らは心を外にあらわさない用心深さでその身を鎧い、ひたすら外国の空気に感染しまいと旅をし

ている」。

さらに続けて、「わたしはわれわれの風習にあきあきしたればこそ遍歴をするので、決してシチリアでガスコーニュ人に巡り合いたいからではないのだ。私は逆にギリシャ人を、ペルシャ人を探しているのだ。私は彼らに近寄り、彼らを考察する。それが私の目的である」と言う。誇張はあるものの、いつの時代にもありうる感想であろう。

実際、モンテーニュは「旅日記」に見られるとおり、積極的に人に会い、幅広く見聞し、観察し、それらについての感想や評価を残している。その記述は、古典や歴史的知識に裏打ちされ、宗教戦争という時代背景を窺わせる記述も多く大変興味深いのだが、それ以上に16世紀のヨーロッパの旅の在り様や観光的行動の様子を教えてくれるまことにありがたい書物である。旅の日誌として書き記されている当時の宿泊や交通などのサービスについての記述も他では出会えない証言であり、全体としてモンテーニュは元祖観光研究者でもある。われわれの祖先であり、先達である思いがする。

### 16世紀の旅のサービス

この時代の交通・宿泊などの旅のサービスの状況については、第3章「中世」で中世末期までの概要を扱ったので、ここではまず、この時代に誕生した《印刷された旅行ガイドブック》を紹介し、次いでモンテーニュの旅日記に登場する旅のためのサービスに関わる具体的な証言を適宜ピックアップして説明に替えることにする。

シャルル・エティエンヌの「旅行ガイドブック」 印刷術が発明され、宗教書を中心に多くの刊行物が出版されるようになったが、旅が盛んになるにつれて出るべくして出たのが「旅行案内」であった。シャルル・エティエンヌ Charles Estienne (1504~64) はリヨンの大手出版社の家に生まれ、医学を学んで医師になり、多くの医学書を執筆している。1550年、家業を継いでいた兄がプロテスタントに改宗してジュネーブに去ったあと、出版社を継ぐことになった。医学書はもちろん、多くの実用書を出版したが、とくに後世に名を遺したのが1552年に出した俗語による旅行案内書「フランスの道路案内」La Guide des Chemins de France であった(この時代 guide の定冠詞は女性形だった)。「フランスの道路案内」は友人たちの要請に応じて出版した旅行ガイドブックで、フランスの主要幹線道路に沿って、見どころや旅行情報を解説した前例のない斬新なガイドブックであった。著者名を記載せず、自由に複製や翻案ができるようにしたため、こののち4世紀間に発行される旅行ガイドブックの元祖であり、モデルとなった。道路地図もまともな旅行情報もない時代のこと、大変な作業であったが、旅行者にとって極めてありがたい案内書であった。

マルク・ボアイエ Marc Boyer の「総合観光史」によれば、16世紀では、まだ国家が道路や橋の維持管理をしておらず、旅行しようとする者はどこで正しい情報を入手できるか全くわからなかった。エティエンヌの旅行案内はその情報を与えることを目的としたものである。執筆者や情報提供者である本人、兄弟たち、協力者たちはいずれも多くの旅をし、旅に慣れており、先駆者たちの業績にも充分目を通したうえで作成したと誇る。自ら医者、

文献学者、天文学者、歴史学者としての該博な知識を総動員し、さらに商人、巡礼者、一般の旅人の話を聞いて補って書き下ろしたと、正確さをアピールしている。事実フランスの都市、町、村、城、農場などを網羅し、さらに距離、ランドマーク、宿駅、宿屋、大司教座教会、修道院などの見所とともに、旅行に必要な情報を満載したのであった。広場を明示し、よい旅館を挙げ、食事の美味しい場所を教え、風景や名所旧跡、面白い事柄はなんでも簡潔に記載し、常時参照できるよう携帯できるサイズにした。同書は大好評を博し、年内に早くも再版され、著作権がなかったからコピーが沢山作成された。地理学者のサー・フォーダム（1854～1929）の調査によれば、1552年～1668年の間に28版が出版されたということだが、現物はほとんど残っておらず、フランス国立図書館に最初の3版だけ、各1冊ずつ保存されているという。

エティエンヌは同じ1552年、巡礼者向けに「フランス王国の観光地と川と聖地案内」Les Voyages de Plusieurs Endroits de France et encore de la Terre Sante, d'Espagne, d'Italie, et d'autre Pays. Les Fleuves de du Royaume de France という旅行案内書も刊行している。こちらはフランス国内から聖地エルサレム、ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼者向けに書かれたものである。

エティエンヌの旅行案内は全くの新機軸であり、海賊版印刷だけでなく、類書も沢山刊行された。ジャン・ベルニュが1579年にイギリスに行く旅行者のための「フランスからスコットランドへの旅行案内」を出し、この本がまた出典も知らぬまま他に転用された。さらに1591年には、マイエルヌ・チュルケという人がエティエンヌのフランス案内をそっくり同じものを刊行した上で、体裁内容をまねてフランス以外の国の旅行案内を追加して刊行しているが、ローマやエルサレムへの行程はそっくり写し取っている。ドイツでも同じスタイルで、説明内容も全く同じものを含むガイドブックが出版されている。

モンテーニュの旅日記に関するエッセイを書いたシャルル・デディヤンが「エティエンヌは当時のベデカーであった」と評しているように、16世紀後半以降この種の旅行案内書は旅する人々の必携の書となっていったのである。

以上エティエンヌのガイドブックについては、マルク・ボアイエから借用した。ボアイエの観光史は、観光者の視点が主体で、観光を可能にする施設サービスについてはほとんど採り上げていないので、以下モンテーニュの「旅日記」の記述から拾い出してみよう。

### 「モンテーニュ旅日記」に見る旅行サービス

実際の旅行者が遭遇したであろう当時の旅行サービスに関わる記述を拾ってみると、以下のようなものがあつた。なお、先述の通り旅の前半は同行の家僕が先行して宿選びをはじめ諸々の手配していたので、記載が具体的であるのに対し、モンテーニュ自身が書いた後半には、宿や交通などに関する記述はほとんどない。その結果、関連の記事は記述の始まったパリ以降の旅程から第一次のローマ滞在までに限定される。

\* シャロン：…「王冠亭」<sup>クワロス</sup>に宿をとった。立派な宿屋で、食器は銀製のものをだし、寝

具類はほとんど絹製であった。 p 6

\*プロンビエール：この温泉場は、昔はドイツ人だけで賑わった所であるが、数年前からフランシュ・コンテの人々やフランス人が大勢やってくる。浴場は沢山あるが、ひとつ目だって大きいのは楕円形をした古い建物で、長さ 30 歩、幅 50 歩、温泉は底のたくさんの穴からぶくぶく湧きだし、上から水を流せるようにしてあるので、入浴者は思うがままに湯加減ができる。…男は股引<sup>ももひき</sup>以外は全裸で入らなければ失礼となり、女も下着<sup>シユミーズ</sup>以外は何もつけずに入らなければならない（挿絵がある）。われわれは天使亭<sup>アンジェ</sup>という宿に泊まった。そこは二つの浴場に通じているので最良の宿であった。かなりの部屋数がある宿全部を借りて 15 ソルしかしなかった。宿のおかみさんたちはとても料理が上手である。かきいれ時にはこの宿も 1 日 1 エキュしたらしいが、それでも安い。馬の飼料は 7 ソル。その他の費用も万事安く手ごろである（9 月 18 日から 27 日まで滞在）。 p 14

\*ルミールモン：9 月 27 日、昼食後にプロンビエールを出発して、山また山の地方を通過した。馬の足音は地にひびき、まるで円天井の建物の上を歩いているようだったし、太鼓がわれわれの周囲に鳴り響いているようだった。ルミールモンに来て泊まる。美しい都市。「一角獣亭」<sup>リコルヌ</sup>に宿をとったが、なかなか良い宿である。ロレーヌ地方ではどこの都市に行っても、フランスのどこに比べても劣らない居心地の良い宿があつて客扱いが良い。 p 17

\*ミュールーズ：…彼らの食事の出し方はわれわれのとは非常に違う。彼らは決して葡萄酒を水で割らない。それもまあもつともである。彼らの酒はとても弱く、わが殿様方は十分水で割ったガスコーニュの酒よりまだ弱いと言われたほどである。だがそれでいてけっこううまい。彼らは下僕たちも主人たちと同じ食卓か、でなければ隣の食卓と一緒に食事をさせる。大きな食卓の給仕もただ一人の下僕で足りる。というのは、めいめいが自分の前にコップないし銀の杯を置いており、それが空になると、給仕が注意していて、それをその場に置いたまま、長い口をもった錫か木の器で遠くから酒を注ぐからである。それから料理の方であるが、一回の給仕に二皿か三皿しか出さない。彼らはいろいろな食べ物をうまく調理して一緒に盛る。 P24

\*バーデン：リマット川の急流に臨み、屋根のない公共浴場が二つ、三つあるが、そこを利用するのは貧しい人々ばかりである。その他の大多数の浴場は、いずれも屋内にあつて沢山の小さな浴室に区切られており、囲いもあれば天井もあり、居室と一緒に借りることができる。そういう浴室はきわめて趣があり設備も整っていて、それぞれ個別に温泉が引き込まれている。宿屋は実に広壮である。われわれの泊まった宿は一日に 300 人の食事を出せるほどに見えた。われわれが着いたとき、まだ大勢の客が残っていた。お客用の寝台がゆうに 170 台はあつた。食堂の数は 17、料理場は 11。われわれの隣の宿には家具付きの部屋が 50 もあつた。宿の壁は一面そこに泊まった貴族たちの盾形紋章で覆われている。 p 27

…われわれの泊まった隣の宿は「町の庭」と呼ばれ、我々の泊まったのは「裏の庭」と呼ばれているが、これらは州の権限に属する公営の旅館で、借主によって維持されている。宿泊料の取り方はどこでもそうだが、外国人に対しては因業である。われわれの場合、寝台九つ付きが4室、うち2室はストーヴおよび浴室付きで、主人一人に対して1日1エキュかかった。召使のほうは一人につき4バツツェン、すなわち9ソルとちょっと、馬は6バツツェン、すなわち1日14ソルにつく。だが、それだけでなく、彼らは、さらにいろいろと普通はしないような狡猾な費目を付けて出す。

彼らは自分たちで町を警備する。一村里に過ぎない温泉場でも警備している。毎晩二人の夜警が家々の周りを回る。敵を警戒するというより、火事その他の異変に備えるためである。時の鐘が鳴るときには、一人がもう一人に向かって大声を張り上げて、今何時か、と問うことになっている。するともう一人が同じように大声でただ今何時と答え、そして、ご用心！と付け加える。

\*リンダウ：われわれは「<sup>クワロス</sup>王冠亭」(数か所に同じ名前のホテルが出てくる)に泊まったが、これは立派な宿屋である。…家具も家の材料もみな樅の木ばかり用いてあるが、これがこのあたりの森の一番普通の木なのである。彼らはそれにペンキを塗ったりニス塗りをしたりして丹念にみがきをかける。…彼らは玉キャベツをたくさん作っていて、それを特別の器具を用いて細かにきざむ。そうやってきざんだものを大桶の中で塩漬けにしておき、それで冬中の<sup>ポタージュ</sup>煮込み料理をつくる(ザワークラウトのこと)。ここでモンテーニュ殿は土地の習慣にしたがって、試しに羽根布団をかけてお休みになったところすっかり満足なされ、これは温かで軽くてよいと申された。…食べ物は豊富であるし、いろいろな種類の煮込み料理やらソースやらサラダなどを用いて献立に変化をつけてくれる。たとえば、我が国にはないことだが、マルメロを煮込んだ料理だとか、スープに輪切りの焼きリンゴを浮かせたものとか、玉キャベツのサラダとかを出してくれた。…よい宿ではきわめて味よくできているので、わがフランスの貴族の家の料理などは比べものにならないように殿には思われた。p42

\*リンダウ～アウグスブルク：旅中、モンテーニュ殿は三つのことを惜しまれた。一つはその土地土地の料理を覚えて帰って、他日自分の家でその腕前を示してくれるような料理人を連れてこなかったこと。もう一つは、ドイツ人の下僕を連れてくるとか、あるいは誰かこの国の貴族をあらかじめ同行者の中に加えるとかしなかったこと。まったく、乞食みたいな案内人の言うなりに引き回されるのに、殿は非常に不満を感じられたのである。第三には、旅に出る前にそれぞれの土地の名所名物を教えてくれるような書物を読んでおかなかったこと、あるいは荷物の中にミュンスターのような本を1冊入れておかなかったことである。(セバスチャン・ミュンスター(1489～1552)のこと。ドイツの地理学者でその『宇宙形状誌』は当時ヨーロッパでもっとも広く利用された地理書。モンテーニュによる仏訳がある)。P44



- \*フュッセン：われわれはここでフロトンと呼ばれるものに荷物を積んで、レヒ川の上をアウグスブルクまで送り届けることにし、私（家僕）も他の何人かと一緒にこれに乗り込んだ。フロトンというのは材木を結び合わせて作った筏で、目的地に着けば解体されてしまうのである。P51
- \*アウグスブルグ：…第一番に驚いたのは、彼らがきわめて清潔好きであること。宿に着いてみると、階段が一段一段白い布で覆われていて、われわれは洗い磨いたばかりの階段を汚さないように、恐る恐るその上を歩かなければならなかった。宿には蜘蛛の巣一つ見当たらない。宿屋によってはガラス窓の前に自由に引けるカーテンまでついている。…ここでは料理を出す順序がしばしば変わる。ざりがにが一番始めに出る。よそではどこでもデザートの前に出されるのに。それに、すこぶる大きなものを出す。多くの宿、それも大きなところでは、すべて料理に蓋をして出す。（訳注によると、蓋をするのは毒を盛られないためで、王侯貴族の家では普通に行われていた）。彼らのガラス窓がぴかぴかに光っているのは、わが国のように窓が固定されておらず、窓枠が自由にはずせるようになっているからで、彼らは頻繁にガラス窓を磨く。p54
- \*インスブルック：われわれは「薔薇亭」に泊まったが、たいそうよい宿で、食卓には錫のお皿が出た。…ドイツの他の都市でも大抵はそうだが、ここでも時の鐘が鳴るごとに夜通し市中を呼び歩く夜番がいた。われわれが通ったところではどこでも肉と一緒に魚を出す習慣がある。その代わり魚の日に肉と一緒に出すことはない。少なくとも我々にはそうしなかった。P68
- \*ボルツァーノ：…ここからモンテーニュ殿は、バーゼルでお会いになったフランソア・オットマンに手紙を書かれた。「わたしはドイツを見物中とても愉快であったから、行く先はイタリアであるとはいえ、今ドイツを去るのはまことに名残惜しい。外国の人間はここでも宿屋の亭主の搾取に悩まされたが、これはだんだんに矯正されていくであろう。われわれの方で、われわれを食い物にするガイドや通訳の言いなりにならなければよいのです」と。ほかの点は、安楽と礼儀、とりわけ正義と安全に満ちているように思われたのである。P78
- \*ロヴェレート：日曜日の朝、この地方で有名な、とてもおいしい魚の取れるガルダ湖をご覧になりたくなり、殿はご自分とカザリス殿とマツクロン殿のために一頭 20 バツェンで貸馬をやとわれ、デスティサック殿のほうもご自身とオトワ殿のために二頭をやとわれ、お供なしで、その日はご自分たちの馬は宿に残してトルボレに昼食をしに行かれた。…皆様は湖水を渡ってそこに行かれたが、行きに5マイル、帰りもほぼそれくらいで、5人の漕ぎ手で3時間ばかりかかった。…ロヴェレートにお戻りになり、ここで皆様はお荷物をドイツではフロットと呼ばれる例の筏に乗せ、費用1フロリンでこのアディジェ川をヴェローナまで送らせることになされ、私が翌日この発送の役に当たることになった。P84
- \*ヴェローナ（イタリア）：…アディジェ川には橋が三つかかっている。私もお荷物を持

ってここに到着した。トレントで取得し、ロヴェレートで承認を受けた《健康証明》がなかったら、一同は市内に入れなかったろう。だが、ペストの危険があるという噂など全くなかった。単に習慣上そうなのか、でなければ何がしかの手数料を稼ぐためだろう。…われわれが泊まった「小馬亭」は実によい宿で、フランスの約 4 分の 1 ほどの安値でたっぷりのご馳走してもらった。P86

\*パドヴァ：宿は設備や待遇など、どの点をとってもドイツとは比較にならない。確かに宿代は 3 分の 1 がた安く、フランスと似たり寄ったりである。…カザリス殿（モンテーニュの義弟で、ここで法律の勉強をするために滞在する）はここで一行とお別れになり、当地の下宿に滞在されることになった。月 7 エキュで宿も待遇もよい。もう 5 エキュお出しになると、下僕も一人お雇いになれたのである。ともかくそれは上等な下宿の一つで、身分の良い人たちのお泊りが多かった。（別のところでモンテーニュは、パドヴァにはフランスの貴族が 100 人以上もおり、ここに集まるフランスの青年たちにとって、自国の習慣や言葉に染まるだけで外国人と知り合いになる機会がなくなるからよくないと感想を述べている）。p 90、p94

\*フェラーラ：到着すると通行証と健康証明のために長時間待たされたが、それは誰もみな同じだった。…宿屋では各室の入口に「健康証明をお忘れなく」と書いてある。到着するとすぐ名前と一行の人数を役人に届けなければならない。役人の許可が出ないうちは泊めてくれない。p 101

\*ロンチリオネ：この道筋の宿は上等である。というのはここが宿駅の表街道となっているからである。貸馬は 1 日につき 5 ジュリオ、一町場につき 2 ジュリオである。そして 2, 3 駅ずつ頼んでも、数日間として頼んでも同じ割合で、しかも馬の世話は全く心配しないですむ。それどころか、借りてきた馬が駄目になれば、途中どこかの場所で他の馬と替えてもらえる。これはシエナで目の当たりに見たことだが、見ず知らずの外国人に馬を貸し、出発時に前払いをしさえすれば、あとは借り手に馬を預けっぱなし。目的地に着いたら貸馬を返すという客の約束を信用するのである。

\*ローマ：到着後 2 泊だけ熊亭（外国人がよく利用する宿）に泊まり、12 月 2 日からはさるスペイン人の家に部屋を借りた。立派な寝室が三つ、食堂、食糧貯蔵室、厩、台所がついていて月 20 エキュである。しかも、亭主は料理人一人と台所燃料までつけてくれた。当地は宿屋が一般にパリよりいくらか設備が良い。…そこからかなり近い金壺亭へ行けば、我々の借りた家と同じ値段で金糸や絹で飾られた王様の部屋のようなところも借りられたのであるが、そこは寝室が独立していなかった上に、モンテーニュ殿は、そういう華美は無用であるばかりでなく、寝台一つが 4, 5 百エキュもするものでは、そうした家具を傷めないように気をつけるだけでもかなわないと考えられた。

\*モンズニ峠：ノヴァレーザで駕籠かき 8 人を雇い、モン・スニ峠の頂上まで担ぎ上げてもらい、それから向こう側は櫓でおろしてもらうことにした。…わたし（モンテ

一ニュ) はモン・スニ峠を半分は馬で、半分は 4 人の男のかつぐ駕籠に乗って越えた。残る 4 人は肩代わりである。彼らは代わる代わる私の駕籠を肩に乗せて行った。登りは 2 時間、石だらけで慣れない馬には骨が折れるが、慣れた馬なら困難も危難もない。…この時(11月1日)はすべてが雪に埋もれていた。下りは1里ばかりで、急で真っ直ぐである。わたしはそこを同じ駕籠かきたちに橇で運んでもらった。8人がかりのその仕事に2エキュを与えたが、一人引きの橇なら1テストンですむ。橇は面白い遊びだが、全く危険はないし、それほど難しいものではない。

貴族 5 人の騎馬による旅行で、従者や荷運びなどを連れた 20 人近い「団体」が、宿屋や食事にさして苦勞することなくヨーロッパを大きく巡回する旅を行っている。16 世紀も末頃になると、少なくとも貴族階級の旅であれば、旅の施設やサービスもそれなりに整ってきている様子が窺えるのである。